

平成 10 年度  
専門演習フィールドワーク報告書

**336 時間 1 万 6 千マイルの大移動**

**香港・イギリスを行く**



1999年2月24日～3月8日

**異文化交流論研究室**

# 目 次

1. はじめに 一旅の目的にかえて—	(柳谷 香苗) .....	1
2. 香港を知るための試み .....		4
2-1. 在香港日本人の見た香港		
(1) 山口県香港駐在員—伊田敏章氏にお会いして—	(藤田 幸) .....	4
(2) 山口銀行香港支店の訪問—香港でみつけた山口—	(柳谷 香苗) .....	7
2-2. 香港人が語る香港		
(1) 社会人との会食で得たもの	(矢野 優子) .....	10
(2) 中文大学生 (The Chinese University of Hong Kong) との交流 (藤田 幸) .....	13	
2-3. 私たちの見た香港	(藤田 恵美) .....	16
2-4. 香港返還・香港回帰祖国 —それぞれの視点—	(藤田 恵美) .....	18
3. イギリスを知るための試み .....		20
3-1. フェアトレードを通して	(渕上 智美) .....	21
3-2. サリー大学一日体験	(聞 天墅) .....	24
3-3. スターリン大学日本研究所	(中村 幸恵) .....	28
3-4. 2つの日本研究学科を訪問してみて	(矢野 優子) .....	31
4. 異文化ミニ体験記		
4-1. 香港にて .....		34
・香港のSPEED	(K. Y.) .....	34
・見知らぬ土地で取り残されたら	(M. F.) .....	34
・ペニュンシュラ・ホテル	(M. F.) .....	35
・100万\$の夜景	(T. F.) .....	35
・ギャンブラー必見!! 香港の競馬体験	(T. W.) .....	36
・試着	(S. N.) .....	37
・九龍城公園	(M. I.) .....	37
・環境への配慮	(M. I.) .....	38
4-2. イギリスにて .....		39
・クロッカスとダフデルに迎えられて	(M. I.) .....	39
・レディー・ジェーン	(T. F.) .....	39
・リーズの危険な夜	(T. F.) .....	40
・キングスクロスでの恐怖体験	(K. Y.) .....	41
・ユースホステルの醍醐味	(M. F.) .....	42
・Yellowと言われた日	(Y. Y.) .....	43
・日本での逆カルチャーショック	(Y. Y.) .....	44
5. おわりに	(聞 天墅) .....	45

# 1. はじめに 一旅の目的にかえてー

柳 谷 香 苗

今回私たち異文化交流論研究室は、フィールドワークとして、香港とグレートブリテン及び北アイルランド連合王国（以下、イギリスと呼ぶ）へ出かけた。この旅を企画し始めた当初は、単なる海外旅行という娯楽意識が先立ち、数冊のガイドブックを頼りに観光地や交通手段などを調べる程度であった。従って、フィールドワークという本来の目的を一人ひとりが自覚し、本格的な計画や実際の準備に取りかかったのは、出発の数か月前になってからである。わずか2週間かぎりの香港・イギリスへの旅を内容の濃い充実したものにしたいと願い、そのためには少しでも多くの知識や情報を得てから出発しなければと思った。

そこでまず最初に、私たちのグループを「香港組」と「イギリス組」に分け、分担してそれぞれ準備に集中することにした。具体的な交通手段や宿泊先、予算などの項目をいくつか取り上げ、それぞれのグループが準備した事柄を全員で話し合うことから始めた。そうすることで計画や準備が効率よく進み、同時に全員の意見が反映されると考えたからだ。

この旅のメインテーマは、国際教育に関する資料を収集することにあった。従って、国際学や多文化教育、外国语教育センターなどへの訪問日程で、スケジュールは埋まっていた。各自がそれぞれの興味や関心に応じて訪問先を決め、FAXやEメールなどを利用して訪問先とのアポイントメントを取りかかった。その一方で、各訪問先でのインタビューに備えて質問内容を準備し、細かいインタビュー・スケジュールを立てた。インタビューを通して得られる情報は現地の人の生の声であるため、可能な限りカメラやテープレコーダーに収めておきたいと思った。そのため道具類などに関しても、事前に故障箇所の有無や使い方、持続時間などを把握しておくかなければならなかった。こういった事前の計画や準備こそが、そのフィールドワークの結果を左右し、同時に予想外の展開にも冷静かつ柔軟に対処できることにつながるということもわかった。

インタビューや現地の人々との交流時に使用する言語

は英語であったので、少しでも円滑なコミュニケーションを図りたいと思い、「ゼミ英語の時間」というものを週一回開いたり、各自で英語力を向上させるよう努めた。しかし実際にやってみると、自分たちの思っていることがなかなか英語で表現できず、口数が少なくなってしまう場面が多くみられ、改めて英語力のなさを実感することになった。

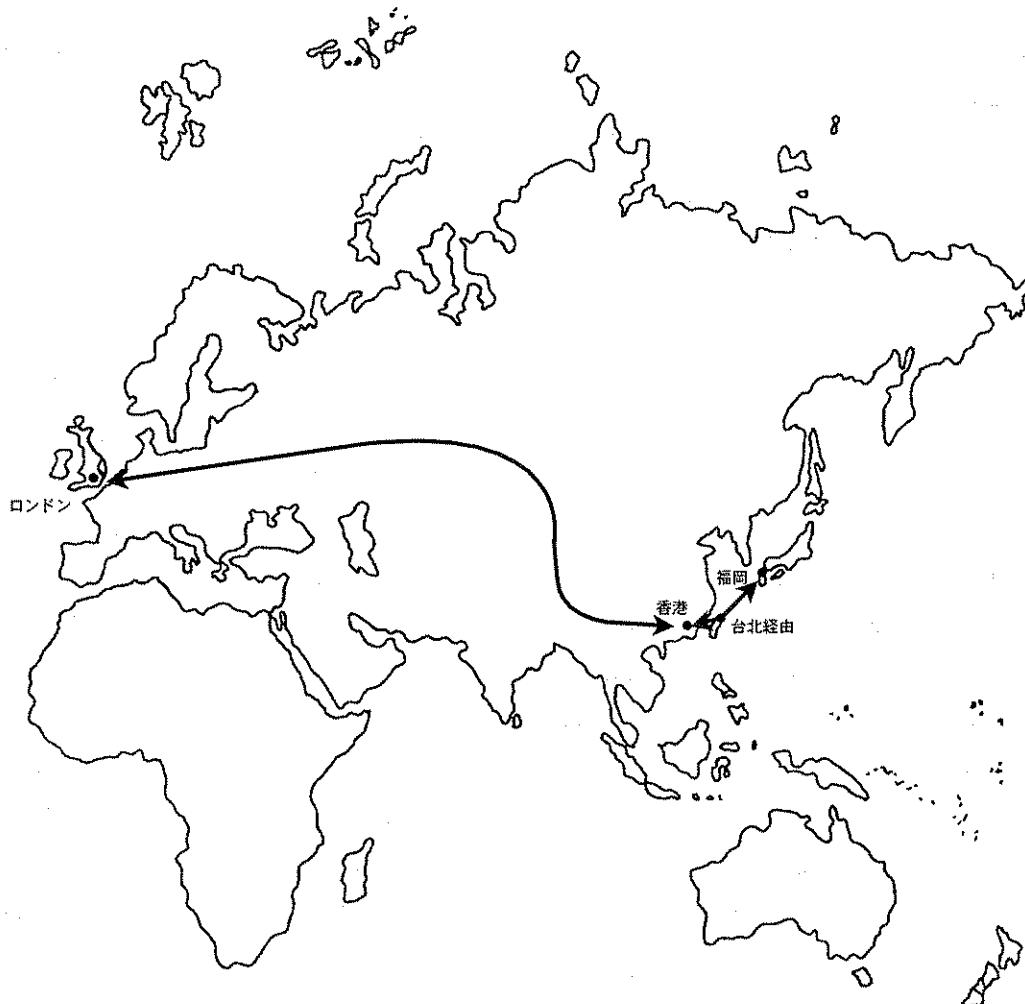
先に述べたような旅のテーマはあったものの、より積極的な旅への参加を行うために最も重要なことは、「私たちなり」の旅のテーマをもう一つ設定することだと考え始めた。話し合いの末に、ゼミで使用したテキスト「異文化を『知る』ための方法」（藤巻正己他著 古今書院 1996年）をもじって、香港を知るための方法やイギリスを知るための方法といった大きなテーマを設定し、せめて「～を知るための方法」を「知るための試み」ぐらいは行おうということを、この旅全体のテーマとして決定した。

フィールドワークの目的や意義の一つは、他人の調査報告や文献資料などに基づいた机上の思考や議論に終始するのではなく、フィールド調査を通じて対象社会を「体感」しながら、ナマのデータ・情報を収集することにあるという（「フィールドワーク：書を持って街へ出よう」佐藤郁哉 新曜社 1992年）。そのため、今回の旅ではまず、いろいろな参考文献を読んで得たものを実際に自分の目で見、耳で聞き、肌で感じてみよう。そして、そのことがそのまま香港やイギリスを知る方法になるのかどうかを考えてみようとした。そして、その次に、できるだけ多くの人の話を聞いて、「それらの人々の語るもの」を通して、香港やイギリスを知る手だてにできるかどうかを考えようとした。

フィールドワークには人や文化との出会いがあり、その出会いは自分にとってかけがえのない財産になる。自分とは異なる言語や文化を持った人々と出会い、その中で自己との比較やギャップを体感する。そういった自己とは異なる「他者」について研究する上で忘れてはな

らないことは、研究・調査・観察などの対象となった人々の立場にたつことである。研究自体に集中するあまり、研究対象を軽視する態度は絶対に避けなければならぬ。このことを一人ひとりが肝に命じて、私たちは香港とイギリスへのフィールドワークに旅立ったのであった。

最後にこのフィールドワークにご協力頂いた多くの方々や、この旅行を通して出会うことのできた多くの方々に、心から御礼申し上げます。



香港を出たキャセイ航空機は、ヒマラヤ山脈・チベット高原・クンルン山脈一帯の東側すれすれの所を北に向かって進む。その間、機体は随分揺れる。帰りもここまで来ると突然揺れ始めた。機内のスクリーンに映し出されるマップと機体の動きを見ながら、「早く通り過ぎますように」と祈った。

尚、フィールドワークの日程(2/24~3/8、12泊13日)については、以下の通り。

2/24 (水) 10:00 福岡発 - 14:50 香港着

- ・香港市内 (ペニンシュラ・ホテル、ハッピーバレー競馬場など)
- ・ニューアスター・ホテル泊

2/25 (木) ・山口銀行香港支店訪問

- ・飲茶
- ・山口県香港駐在所訪問
- ・コースウェイ・ベイ散策

・香港の社会人との会食

- ・女人街散策
- ・ニューアスター・ホテル泊

2/26 (金) ・九龍公園散策

- ・中文大学日本研究学科訪問
- ・ビクトリア・ピーク
- ・23:55 香港発ロンドンへ

・機内泊

2/27 (土) ・04:55 イギリス着

- ・ロンドン市内 (ウェストミンスター寺院、

- 国会議事堂、コベント・ガーデンなど)  
 ・フォルテ・ポストハウス・ブルームズベリー・ホテル泊
- 2/28 (日) ・バッキンガム宮殿、衛兵交代  
 ・ロンドン塔  
 ・フェア・トレードオフィス訪問  
 ・フォルテ・ポストハウス・ブルームズベリー・ホテル泊
- 3/ 1 (月) ・大英博物館  
 ・長距離バスでロンドンからリーズへ  
 ・フェア・トレード会議出席  
 ・B&B泊
- 3/ 2 (火) ・列車でリーズからヨークへ  
 ・ヨーク市内（ヨークminster寺院、バイキング・センター、歴史博物館など）  
 ・列車でヨークからリーズへ、長距離バスでロンドンへ  
 ・ロイヤル・ナショナル・ホテル泊
- 3/ 3 (水) ・サリー大学ロンドン校訪問（英語教育コース、多文化教育、留学生センターなど）  
 ・大英図書館  
 ・ミュージカル観劇、ビューティー・アンド・ビースト  
 ・ロイヤル・ナショナル・ホテル泊
- 3/ 4 (木) ・空路にてロンドンからグラスゴーへ、列車でスターリンへ  
 ・スターリン大学日本研究学科訪問  
 ・ユースホステル泊
- 3/ 5 (金) ・スターリン城など  
 ・列車でスターリンからエジンバラへ  
 ・オールド・タウン、ニュー・タウン、エジンバラ城など  
 ・列車でエジンバラからグラスゴーへ  
 ・ユースホステル泊
- 3/ 6 (土) ・空路にてグラスゴーからロンドンへ  
 ・ナショナルギャラリー、シャーロックホームズ・パブなど  
 ・22:20 ロンドン発香港へ  
 ・機内泊
- 3/ 7 (日) ・18:05 香港着  
 ・自由行動  
 ・BP インターナショナル・ハウス泊
- 3/ 8 (月) ・九龍城公園など散策  
 ・14:00 香港発 - 19:30 福岡着



イギリス国内は、バス・列車・飛行機で移動した。  
 冬でも緑の絨毯の続くカントリー・サイドは、ため息の出るほど美しかった。

## 2. 香港を知るための試み

1997年7月1日に香港は中国に返還され、約150年間に及んだイギリスの植民地統治に終わりが告げられた。1998年の夏には、フィールドワークの行き先を香港・イギリスと決定し、秋頃から少しづつ勉強を始めていた私たちは、香港返還1周年というニュースを耳にし、これに着目することにした。とはいえ、香港返還という国際政治・国際関係に関わる問題は、私たち専門演習の領域外の事柄であったため、テキスト1冊に的を絞って読み進めることとした。国際関係論研究室の岩下明裕先生に相談し、私たちにも読めるようなテキストを推薦して頂いた。「香港返還交渉：民主化をめぐる攻防」（中國和仁国際書院 1998年）は、その難解な内容に私たちが溜息をつきながら読み進めたテキストである。このテキストによって、歴史的背景、香港の地位、植民地統治、返還交渉、返還後の問題などを理解することができた。岩下先生、本当にありがとうございます。

さて、テキストによると、定期的・組織的な中国とイギリスとの貿易は、18世紀のはじめから行われるようになったという。18世紀後半に、イギリス東インド会社によるアヘンの売り込みが始まり、アヘン戦争を招く。1842年の南京条約により、香港島がイギリスに正式割譲される。さらに、アロー号事件などをきっかけに、1860年の北京条約により九龍割譲が行われる。大国が清国というパイを取り合う中で、イギリスは1898年に九龍半島の大半を占める新界（New Territories）を租借する。租借期限を「九九」年間（中国語の「久久」と同じ発音、永久・無限を意味する）したことから、実際に九十九年後の返還（新界だけでなく、それに続く九龍や香港島を含めて）の口実を中国側に与えることになったというのは歴史の皮肉であろうか。「租借期限の明

記がなかったならば、香港返還という歴史的事件はなかったかもしれない」という文章が印象的である。

テキストによれば、香港返還は中国の香港・マカオ・台湾統一をめざす「一国家二制度制」の重要な実験場であり、二重国籍問題や、言論・集会の自由、政治的自由などの人権をめぐる問題など、多くの未解決の問題を抱えているという。テキストの最後で展開される民主主義とアジア的価値観との間の対立概念などを読みながら、「さて、わたしたちは香港の大学生や社会人に会って、何を聞こうか」と迷ってしまった。「政治的にまだセンシティブな状況の中で、香港をちょっと訪問するだけの私たちがこれらのこと聞くのは難しい」、「相手側の迷惑になるのではないか」、「聞いても、答えてくれないので？」と、いろいろ考えさせられた。最後には、長い歴史のなかで、香港返還という歴史的事実を生きることになった人として現代の香港人を捉え、その上でその人たちの日常生活にできるだけ近づく努力をしてみようということになった。

フィールドワークの目的の一つは、「香港を知るための方法」を「知る」にはどうしたらよいかを考えることであった。そこで私たちは、香港を三つの視点から見比べてみるとこととした。三つの視点とは、「在香港日本人の見た香港」、「香港人が語る香港」、そして、「私たちの見た香港」である。また特に、香港返還から1年以上を経た今日、仕事や生活などの面で何か変化がみられるのかどうかについてお話を聞いてみることとした。

尚、香港では特に、山口県香港駐在員である伊田敏章さんに何から何までお世話になった。伊田さんには、フィールドワークに出発する前からさまざまな資料を送っていただいた。ここで厚く御礼申し上げたい。

### 2-1. 在香港日本人の見た香港

#### (1) 山口県香港駐在員 伊田敏章氏にお会いして

##### ① はじめに

2月25日。私たちは香港での2日目を迎えた。まだ2月だというのに、コートどころかニットも必要のな

藤田 幸

い暖かさ。そして、何よりも湿度が高い。晴れていても視界が悪く、どことなく白っぽく感じられるのは、大気が汚染されているからだそうだ。昨夜、香港に着

いたばかりの私たちは、真っ先にプロムナードに出て夜景を眺めた。香港の絵はがきやポスターでお馴染みの夜景は、やはりスマッグに煙っていた。

朝早く九龍側に立つホテルをあとにした私たちは、香港で一番賑やかなネイサン・ロードに出て、慌ただしく人や車が行き交う街中を少し歩き、プロムナード沿いにフェリー乗り場に向かった。香港人の足と言われているスターフェリーに乗って香港島へ向かう。スターフェリーは1階と2階で料金が違う。眺めの良い2階は2.2香港ドル（約30円）。スターフェリーを降りてすぐの一等地に、エクスチェンジ・スクエアビルがある。日本総領事館、日本国際観光振興会などが入っており、香港の旗や日本の国旗が目につく。今日訪問予定の山口銀行香港支店はこのビル内にあり、また山口県香港駐在員事務所もここにある。

ビルの入口を入ると、エレベーターの両側に水が流れ、花や木々の緑にほっとする。エアコンのきいた館内から、すでに暑くなりつつある外を眺める。昨日初めてお会いした伊田さんともすっかり親しくなり、あらためて席についてインタビューをというのも堅苦しい感じがしないではなかったが、用意してきた質問票と録音用のテープを机の上に並べた。日本に帰国してから感じたことではあるが、インタビューの内容によっては、公の立場にある山口県香港駐在員として答えをはっきりと出せないものもあったのではないかと思う。しかし、私たちがそのような質問をしても、伊田さんはご自身の考えを私たちにわかりやすい言葉に置き直し、応対してくださった。

## ② 山口県香港駐在員とは

山口県では、アジアにおける経済活動の中心地であり、また情報拠点でもある香港に、平成3年度（1991年度）から駐在員を派遣し、山口県の国際化の推進に係わる多面的な業務を行っている。その主な業務内容は、情報収集、山口県の紹介や宣伝、人的ネットワークの構築等であり、近年は物産観光展の開催や大学生の交流事業などにも取り組んでいる。駐在員は平成3年度以前にも昭和35年12月から昭和47年3月の間、4代（4人）にわたって派遣されていた。復活したのが平成3年で、今年で山口県香港駐在員の派遣は8年度

目に入る。しかし、香港返還やアジア・香港経済の悪化など海外の事情に加え、特に日本経済の衰えや行政改革といった国内事情があり、山口県香港駐在員のポジションは、3代目となる伊田さんの3年目の任期が終わる平成11年3月末をもって閉じられることが決まっていた。初代駐在委員となる責任は重いだろうが、最後の駐在委員というのも残務処理など大変なことと思う。



香港で発行された観光PR。東京か大阪から入り、山口・福岡を回るよう観光ルートが設定されたもの。

伊田さんはとても几帳面な方で、私たちへの連絡や資料送付などの細かな点まで気を配って下さり、私たちの短い香港滞在が実り豊かなものであるようにサポートして下さった。「立つ鳥 跡を濁さず」の文言通り、伊田さんのような駐在員ならばきれいに事務等を片づけ、多くの人々に惜しまれながら香港をあとにされることだろうと感じた。

## ③ 山口県香港事務所

山口県は日本の中で経済や情報発信の主要都市でなく、地方都市の一つにすぎない。そのような県の行政機関が香港に事務所をもっていることに興味をもち、また「なぜ山口県が香港に？」という素朴な疑問をもつた。しかし、「なぜ香港に？」という問いを、「なぜアジアに？」といった問いに置き直してみると、その重要性がわかってくる。国際交流や国際理解を進めていく上で、山口県はまずどちらの方向を向くかを考えるとき、「アジア」が候補に挙がってくる。東アジアについては、既に中国・韓国と友好姉妹提携が結ばれている。従って、次に東南アジア諸国の中で駐在員をどこに置くかということは、「東南アジアの中心」がどこであるかを考えることもある。

そこで挙がってきた候補地は「香港」と「シンガポー

ル」。従来は香港の重要性に軍配が上がっていた。しかし、香港返還以後、また香港経済の衰え以降、香港をあとにする企業が目立っているという。香港の人々もまた、シンガポールのこれから的发展性を口にし、アジアの拠点としての香港の位置がシンガポールによって取り替えられてしまうであろうと心配していることがわかった。世界の最大の市場の一つ中国への窓口ということで、香港はこれからも重要な役割を担っていくであろうという人もいれば、中国は上海や広東省・福建省の経済地区からそのまま世界を開けていくであろうから、香港は廃れてしまうかもと危機感をいだく人もいるようである。いずれにしても、山口県香港駐在員だけでなく、その他の都道府県でも香港駐在員を置くことを辞める決定を下しているところがあるという。

「やまぐち国際化推進ビジョン」(平成9年3月)によると、「現在派遣している香港駐在員に加え、新たに東南アジア地域にシンガポール駐在員を派遣し、今後の交流に向けて情報収集に努めます」とある。このことからも、香港とシンガポールが東南アジアの拠点とされていることが明かである。香港事務所の撤退は、この計画の挫折を意味するのだろうか?。香港駐在員の仕事のなかで特に私たちの印象に残ったのは、国際観光に関するアンケート調査や山口観光物産展の開催などである。山口県内の市町村の姉妹提携状況をみると、東南アジアやアフリカ、大洋州との交流はまだないようであるが、経済関係や、資源や労働力の依存関係からいえば、東南アジアとの関係をもっと見直すべきではないかと思った。

#### ④ 仕事

駐在員として仕事をする上での日本と香港の大きな違いは、「反応のスピード」だそうだ。例えば、どこに書類を提出した場合、香港では遅くとも2~3日以内に返事が返ってくる。また、反応の仕方もストレートである。これは日本式の行政システムと、英国の影響を受けた香港の行政システムとの違いであろう。私自身が香港を感じたことであるが、私たち日本人は何か答を求められた場合の反応の仕方として、一個人の答ではなく、一集団の一人としての答を出そうとする場

合が多いように思う。だから、答を出すスピードが遅くなってしまったり、曖昧な答しか出せないということが出てくるのかもしれない。香港に住む日本人は、当初はその違いに戸惑うようである。が、私たちがインタビューをした在香港3年になる伊田さんの反応のスピードは、とても早いものであった。伊田さんのもっぱらの心配は、日本に帰国して行政機関のなかに再適応できるかどうかだそうだ。

蛇足になるが、すでに香港での生活が3年になる伊田さんは、ときどき「香港人」らしい姿を私たちに見せた。例えば、食事のとき香港ではよくお茶を飲む。私たちも香港ではたくさんお茶を飲んだが、お茶を入れてもらう度に私たちは頭を下げてお礼を言った。しかし、香港の人々はお茶を入れてもらっても、その度におじぎをして礼を言ったりはしない。片手でテーブルをちょんちょんとたたく、これがありがとうを表している。礼の形を重んじる私たち日本人からすると、片手でテーブルをトントンとたたいてお礼...?と、とてもすんなりマネできない感じがするが、これが香港の生活の一部となっている。食事中、片手でお礼を示す態度が自然にでてくる伊田さんを見て、これが異文化にとけ込むということなのかと思ってみたりした。

#### ⑤ 生活

山口県香港駐在員となったのはご自身の希望ではなく、勤務命令あるいは要請という形による。家族を香港に連れてこなかったのは、仕事を続けたいというご夫人の気持ちを尊重したこと、子どもが小さいので医療面が日本ほど徹底していないのを心配したこと等の理由によるそうだ。日本に比べると治安あまり良くない。香港でみかけたアパートやマンションの入口には警備員がいて、玄関が2重になっていたり、鍵が何十になっていたりと、用心には用心を重ねるのが香港式だ。

日本にいるご家族との連絡は、もっぱら電話。海外出張を終えて帰国してみたら、家族のなかでの自分の居所がなくなっているのでは?とちょっと心配しておられた。香港での休日は日本での生活とあまり変わらず、ゆったりとした時間を過ごされているそうである。交友関係は、香港に住む他県から派遣された駐在

員（現在、香港には14府県が駐在員を置いている。とくに九州地方からは、福岡県、熊本県、宮崎県、鹿児島県、そして沖縄県の5県が駐在員を置いている）や企業関係者、香港の社会人と多岐にわたるように心がけておられるそうである。香港の社会人というのは、地元の日本語クラスに日本人が出かけていって、日本語の授業を助けたり、話し相手になったり、交流をしたりというなかで生まれた交友関係だそうだ。よく海外の日本企業では、休日も同じような職場の人間と「日本人同士でゴルフ」という話を聞くが、伊田さんの場合はちょっと違っていた。

その人々とは、ほとんど日本語でコミュニケーションができるそうだ。香港の社会人は日本語に興味をもっている人も多く、勉強熱心で日本語に堪能である。しかし、香港で生活していくためには英語と広東語は必要であり、伊田さんも日常会話程度は広東語ができるよう独学されたそうである。

## (2) 山口銀行香港支店の訪問 —香港で見つけた山口—

### ① はじめての香港

1999年2月24日午前7時すぎ、重いスーツケースを椅子代わりにして、小郡駅のプラットホームで新幹線を待った。これからいよいよ香港に向かって出発する。みんなの表情には初めての香港に期待する気持ちが表れているものの、後期試験のレポート提出などからくる睡眠不足のせいであくびをしたりと、あまりシャンとした気分とはいえないかった。日本と香港との時差は約1時間。台北経由で、香港時間の午後3時頃（日本時間の午後4時頃）に香港に到着した。空港では香港に滞在する間いろいろお世話をして下さる香港駐在員の伊田さんが私たちを迎えて下さっていた。ファックスのやりとりなどで何となく親しみを感じるようになっていた伊田さんという方が、また県庁マンである伊田さんという方がどんな感じの人なのかをあれこれ想像して、私たちはこの日の出会いを楽しみにしてきたのである。

この日の日程は香港市内の観光と決めており、空港から市内への移動は市民の足の一つとなっている2階建てのエアバスに乗ることにした。空港特急列車（エ

### ⑥ 香港返還

「香港返還の日はどう過ごされましたか?」、「香港返還後の香港をどうみますか?」などの質問に、当日の新聞や写真などを示しながら答えて下さった。詳しくは「香港返還」の項で後述されているので、そちらを参照いただきたい。

最後に、今回のフィールドワークを通して私たちが一番お世話になった人、それが伊田さんであった。インタビューのときも、はっきりとご自身の意見を話して下さった。紙面の関係上、すべてを書けないのが残念である。私たちは、日本人が海外で働くことの魅力や厳しさを、伊田さんを通して教わった。「異文化の地で働くことは、きっと君たちにとっていい刺激になるよ。」と話して下さった伊田さんに、ここであらためて感謝したい。

柳 谷 香 苗

アポート・エクスプレス）だと市内までわずか15分足らずだが、バスだと約1時間くらいかかる。しかし、バスだと新空港から市内までを島づたいに行くので、新しい橋をいくつも渡り、車窓からダイナミックなパノラマを楽しむことが出来る。移動中にバスから見える香港の景色に最初はみんな興奮気味だったが、至る所で開発工事が行われていたり、貧富の差が激しい住宅街やゴミだらけの街並み、そして人通りの多すぎるくらいにぎやかな繁華街を目にして、香港の経済状態や生活環境などについて出発前までに抱いていたイメージとのギャップに驚いた。ニューアスター・ホテル（新雅園酒店）で、重いスーツケースを置いて一息。

その夜、伊田さんの案内で香港市内を歩いてみた。香港には私たちのホテルがある九龍と、明日訪問する山口銀行香港支店などがある香港島とがあり、この間はフェリーや地下鉄などで結ばれている。慣れない香港ドルを数えながら、一人ひとりが戸惑いながらも地下鉄やフェリーなどの料金を払い、香港ドルに慣れる努力を始めた。香港島に渡ると、そこは行政の中心であるセントラル。ライトを浴びて浮かび上がる香港の

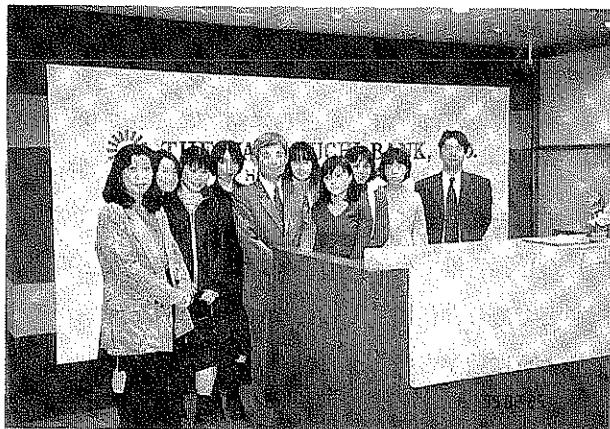
議事堂。このあとに訪問する英國の國會議事堂はどんなものか、建築に英國の影響は？と、興味が湧いてくる。夜の公園に集まっているのは、フィリピンなどから家庭のメイドやベビーシッターとして働きに来ている若い女性たち。日曜日になると道一杯にこういった女性が集まり、「フィリピン通り」と呼ばれるほどになるそうだ。手をつないで賛美歌を歌ったり、お互いのつらさをなぐさめあったりと、自由になるお金の少ない女性たちは1日を公園でのおしゃべりに費やす。1年に1度の里帰りができる仕事を義務付けているようだが、家族と離れての1年はさぞかし長いことだろう。香港の共稼ぎ、女性の職場進出は、こういったアジアからの女性の家事労働力で支えられていることを実感した。

伊田さんが紹介して下さったお店で、初めて香港での食事をした。本場の中華料理は、やはり丸い回転テーブルと長いはしが印象的だった。1年半前までのイギリスによる香港の統治の余韻を感じさせるように、私たちの周りにいる人々は中華系の人々の中に混じって英国人も多く見られ、また広東語の中に英語も聞こえるといった状況で、異なる言語や文化を持つ人々が共に生活する社会に入って、今まで体験したことのない何とも不思議な感覚の中での食事だった。食事のメニューもまた異文化を感じさせるものばかりであった。特に印象に残っているものは、カエルやハトの肉、ダチョウの卵（ピータン）、西瓜やマンゴの生ジュースなどなど、なかなか日本では食べる機会のないものである。その後、深夜まで人と車の行き交う香港の繁華街を歩き、香港人の社交場の一つであるハッピーバレー競馬場に行き、ちょっと試しにとばかり少ない掛け金で競馬を楽しんだりして、初日から充実した一日を過ごすことができた。明日は、山口銀行香港支店を訪問する日。

## ② 山口銀行香港支店の訪問

香港島の一等地に位置する山口銀行香港支店は、外観が鏡張りの高層ビルの上階にあり、そこから見える外の景色は最高だった。「きっとここからの夜景はきれいなんだろうな」とうらやましく思った。ガラス張りの玄関入り、応接室兼会議室に通される。ソフト

タッチな壁の色、ふかふかした絨毯、座り心地の良い椅子、障子を思わせるインテリアの配置など、来客をゆったりとした気持ちにさせる空間となっている。支店長室には、銀行が出資事業を行った時に得られる名誉のストーン（クリスタル製）が並べられていた。筆頭銀行は英國系、中国系などとなっており、その名前の下に多くの関係銀行名が刻まれている。銀行が最高の誇りとするこれらの盾の実物を見てることができてドキドキした。



山口銀行香港支店にて、高橋支店長（中央）  
山口県香港駐在員伊田氏（右端）

オフィスの方を覗くと、机の配置や仕事のスピード、雰囲気など、日本のオフィス空間とは異なっていたため、ここでも文化の違いというものを実感した。市場のデータは即時にこのオフィスに入ってくるようになっており、コンピューターの前で職員の方が情報に目を通しておられた。こういったオフィスでは、ちょっとトイレを併設というのも簡単ではない。シンガポールもそうであったが、こういう高層ビルのトイレには鍵がかかっており、いちいちキーを片手にトイレにいくことになる。セーフティーあるいはセキュリティのためだそうだ。

## ③ 山口銀行香港支店、高橋支店長へのインタビュー <仕事について>

Q：なぜ香港に山口銀行があるのですか？

A：支店は韓国に1箇所、中国に3箇所、事務所はタイやインドネシアなどに6箇所あります。

地元の取引先の企業が海外進出をしているため、銀行がそのサポートをするということが一番の目的です。それに加えて、資金を別の国（主にアジ

ア) の政府や銀行、企業などに貸し付けたり、あるいはそれらが発行した債権(社債)を買ったりすることも目的です。さらに英語での業務が可能な唯一の支店が香港支店であったことも、山口銀行が香港にある理由でもあります。

Q: 仕事上、どのような企業や団体、人々と交流がありますか?

A: 各金融機関、香港金融管理局、日本の銀行の支店、領事館、日本貿易振興会(ジェトロ)など。

Q: 仕事をする上で、日本と香港とでは何か違いはありますか?

A: やはり、一番の違いは言語、主として英語です。また、仕事が常に「契約書」の上で成立することもあります。日本のように「これくらいならいいだろう」という妥協は全く許されません。契約書がないことは絶対にしないという考えは、中国的というよりもむしろイギリス的な考え方方に影響を受けていると思います。現地職員を雇うときも、どういった契約条件で雇うのかをしっかりとおかないと、契約書がない仕事は絶対にやらないのでトラブルの元になりますから。

Q: 香港で仕事をする上で、困難なことはありますか?

A: やはり言葉ですね。特に契約書などに載っている英語の法律用語が難しい。また読むことよりも、話すことの方でいろいろ問題が生じます。特に、何か事が起きた時の相手との対応が難しい。例えば、仕事上何かトラブルが生じた時に、自分に非がないことを言い表すことがなかなかできません。日本人はすぐに自分から謝る習性がありますが、香港の人々はたとえ自分が悪くてもすぐに誤ることはせず、どんな時でも必ず自分の意見を述べます。そのため自分たちでは処理できない問題の時は、必ず英国系の弁護士をたてて対応するようになっています。

Q: 女性の海外派遣についてお伺いしたいのですが。

A: 今のところ、女性の海外派遣はしていません。安全性に欠けるということが一番の理由です。今後も女性の海外派遣の可能性はないと思います。海外に派遣されるには、海外の法律や経済に関する知識を持つこと、英語力などの能力を持つこと、

そして社内の海外派遣認定試験に合格することが最低の条件となっています。女性でこれらの要件に合格する人も出てくると思いますが、会社として安全面をクリアするためには、それに比例してコストもかかるのが現実問題です。例えば、女性でも安全なアパートを確保するには、それだけコストがかかるため、それだけのコストをかけて海外派遣をしたいという能力を持つ女性が出てこない限りは、なかなか難しいのが現状です。

#### <生活について>

Q: ご家族についてお聞きしても宜しいですか?

A: 家族を連れてくる、連れてこないは個人の自由なので、私の場合は日本に家族を残してきました。それは、子どもの教育の面において、いろいろ問題が生じるからです。香港ではインターナショナルスクールがありますが、これでは日本に帰った時に高校卒業の資格がなく、大学に即受け入れられないため、子どもは日本に残して単身赴任の形をとりました。

Q: 毎日の生活はどうされているのですか?

A: 掃除や食器洗いなどをしてくれるサービス・アパートメントに住んでいます。洗濯や炊事は、自分でやっています。香港では日本と違って基本的に残業がないため、帰宅時間はたいてい夕方6時から6時半くらいです。

Q: 余暇はどう過ごされているのですか?

A: 日本にいたときの余暇の過ごし方とあまり変わりません。香港には日本の本屋がありますが、値段が日本の1.8倍と高いため、出張で日本に帰ったときにまとめて本を買い、土・日は読書をしたりゴルフに出かけたりしています。また、日本のデパートも香港に多く進出していますから、日本食にも困りません。が、現在では撤退するものも増えています。香港に残っている純粋な日本のデパートは、そぞう、三越、ジャスコ、ユニーです。

#### <香港返還について>

Q: 香港返還前と返還後とで、生活する中で何か変化や影響を感じることはありますか?

A：香港に着任したのが、香港が返還される3か月前の1997年の4月であったため、返還前の香港の状況はよく分かりません。若干変わった部分は、やはり全てが中国よりになったことでしょう。例えば、中国に行く時のイミグレーションが速くなつたことをはじめ、本土からの観光客の増加、逆に香港の物価が高いため本土に足を運ぶ香港人が多いことなどです。また、テレビ放送で英語の番組よりも広東語の番組の方が増えたという点で、メディアにおいても中国よりになったと感じます。

Q：世界における香港の役割は何でしょうか？

A：香港の返還を一番期待していたのは、やはり中国本土でしょう。中国が今現在行っている国営企業改革や金融改革などの窓口として香港を期待していましたが、アジア危機に直面して、今中国は深刻な問題を抱えていると思います。経済危機が回復し、香港自体がどこまで回復し、中国本土の窓口になれるかが課題でしょう。

#### ④ インタビューを終えて

長いやりとりがあったのだが、上記のように要点を示してみた。今回のインタビューは、この旅の最初だったということもあって、インタビューそのものがどういうものなのか分からず、決して要領よくスムーズに進んだとはいえないかった。インタビューは事前に用意した質問事項に沿って進めればいいと簡単に考えていましたが、それだけでは何の収穫もないということを知った。相手の回答をどう深めていくか、あいづちをうちながら次の質問をどう構成し直すか、回答によって

新たな質問をどう加えていくかなど、大変なエネルギーと集中力のいる作業だということを実感した。高橋支店長の柔らかな応対と、忍耐強く私たちに対応して下さったお人柄に感謝したい。

「はじめに」の章で述べたように、フィールドワークの目的や意義はインタビューなどを通して現地の人のナマの声や情報、データを収集することであるが、研究や調査対象となる人々の立場に立って行わなければならない。今回の私たちのインタビューは、事前に用意した質問だけを順番に聞くだけで、相手が何を話したいのか、話そうとしているのかに注意を払う余裕はなかった。また途中で「間」があき、質問者同士が質問を譲り合ったりしてシーンとなってしまうこともあったため、逆に高橋支店長の方で気を使って下さり、間があかないように話を膨らませて下さった。こういう態度こそ、相手の立場を考えた話上手の技なのだと関心すると同時に、拙い自分たちのインタビューを申し訳なく感じた。自分たちの甘さ、安易に考えていたインタビューの難しさを身を持って痛感した。

2人の在香港日本人にお話を伺ってみて、私たちの見えない・知らない香港が、少し姿を現したような気がする。東京都の半分の面積しかない香港には約670万人の人々が住み、在香港日本人は約2万人。山口からは想像もできないような混雑ぶりである。そんななかに、山口銀行をはじめ、県庁の出張所、山口県の企業等がでている状況を垣間みて、経済のボーダレス化や、人の移動のボーダレス化というものを実際に感じることが出来たと思う。

## 2-2. 香港人が語る香港

### (1) 社会人との会食で得たもの

#### ① はじめに

香港人自身の語る香港とは、一体どのような所なのだろうか。社会人に対するインタビューは、退社後に集まっていたので食事をしながらという形をとった。当然のことながら、録音することもメモを探りながら話すことも出来ない。何となく雑談のような雰囲

矢野 優子

気の中でインタビューしたことを記憶にとどめ、後で急いで書いたメモをたどりながら、私なりに考えてみたいと思う。

#### ② 社会人との出会い

香港の社会人には、山口県香港駐在員の伊田さんを

通じてアポイントメントを取ってもらった。伊田さんが時々足を運ぶ日本語を勉強する会のメンバー4人が集まって下さることになった。4人とも女性で、1人は結婚しているとのことだった。4人とも日本語は堪能とは聞いていたが、中文大学の学生との交流と同じように英語で話す予定にしていたので、出来るかどうか実は非常に不安であった。彼女たちとの夕食懇談会の前に、我々は2回インタビューを経験したのだが、それはいずれも在香港日本人に対してであり、しかも録音させてもらったり、質問票を見ながら、メモを探つたりしながら、という形式であった。

さて、約束の時間が近づき、夕食会の場所へと向かう。ホテルから歩いて数分の所にある中華料理レストランであった。狭い入口と異なり、店内は広く落ちついた雰囲気。一番奥のテーブルで、少し緊張して、それでも期待に胸を弾ませて、彼女たちを待った。間もなく、仕事帰りの社会人たちが次々と到着し、「こんにちは」、「初めまして」と日本語で話しかけてくれた。そんな彼女たちの姿に、英語で話す約束を都合良く忘れた私たちであった。

彼女らの職業は、会社経営（社長）、日系銀行香港支店勤務、洋服店勤務、保険会社勤務、とそれぞれ異なっていた。食事中、何度も携帯電話がかかってくる人もいて、その電話に早口の英語で応対するのを見、香港で仕事をする上で英語の必要性を感じると共に、忙しい合間にねって私たちのために時間を割いてくれたことにあらためて感謝した。香港人、日本人といった具合に、彼女たちと一人交代で座り、主に近くに座った人と話を交わすことにした。前述のように、このインタビューは夕食懇談会という形式で行われたので、



香港の社会人（前列右側2名、左側2名）との会食

何気ない会話の中で自分たちの知りたいことを聞いていかなくてはいけない。おいしそうな中華料理を前に、料理に気を取られながらも、香港の社会人へのインタビューは始まった。

### ③ 香港の生活

彼女たちは、いわゆる「キャリアウーマン」である。出発前の準備としてシンガポールのキャリアウーマンのドキュメンタリーを見て、イメージを膨らませてきた。日本のキャリアウーマンのステレオタイプといえば、男性と同等に働き、収入も多く、一人暮らしをしている、といったところである。香港のキャリアウーマンも似たようなものだそうだが、やはり異なる点もある。日本よりも能力を認めてもらいやすいのだとう。つまり、日本では能力がある・ないの前に、まず女性であること自体が大きな壁となって立ちはだかる。女性が認めてもらうことは容易ではない。香港では、能力のない人はついていけなくなるかわりに、能力のある人は性別に関わらず認められ、能力を發揮出来るのだそうだ。うらやましく思う反面、実力社会で生き残るために努力を考えると、溜息が出そうであった。

また、親と同居しているという点も、日本のキャリアウーマンのイメージとは異なる。さすがに収入を聞くことは出来なかったが、彼女たちは、ある程度の高収入を得ている感じがした。保険会社に勤務するアニアさんは、「一人暮らしをしたい」とお金を貯めているそうだが、アパート代が高すぎて一人暮らしなどとても出来そうにないというのが現状だそうである。安全性の面などでしっかりした所に住むには、月々の家賃が日本円にして何十万とかかるのが香港の常識なのである。日本を出て香港で働く日本人のキャリアウーマンたちが、1部屋に4人で暮らし、部屋代を節約しているという番組も見た。「そんなにまでしてなぜ香港で働くのか」という問いに、「実力が認められる」、「働きがいがある」と答えていたことを思い出す。

キャリアウーマンというよりも、働く女性。この際、「女性」という名称もとってしまって、単なる「社会人」。そんな印象を与える4人だった。働くことが当たり前の香港では、特にキャリアウーマンという名称

を使う必要はないのかもしれない。ちょっとシャイで、親しみやすく、優しい感じの4人、しかも広東語・英語・日本語を流暢に話し、自分の意見というものを持っている4人に出会って、女性が普通に働く社会人としてみられる日本社会の未来を思い描いてみた。

#### ④ 香港が受ける日本の影響

結局、香港の社会人との会話は最初から最後まで日本語で通した。彼女たちの日本語は流暢で、さぞかし長期にわたって日本語を勉強したのだろうと思っていた。しかし、私の予想に反して、彼女たちの日本語学習歴は長い人で6年、短い人では何と3年であった。しかも、日本語専攻で勉強した人はおらず、仕事の合間にぬって夜間に開かれる日本語クラスで学んだだけという。楽しくて日本語クラスに通い続けていると答えた人もいた。具体的にどのように日本語を勉強したのか、また、英語の勉強の仕方と何か違った点があったのかなど聞き出せた人はいなかつたが、少なくとも私たちが学校で英語を勉強したのとは異なる動機や方法、努力などをもって勉強したのだろうということは分かった。

アニタさんに尋ねると、日本人の男性が好きだから、日本人の恋人がいたから、という答が返って来た。なるほど、それは日本語を勉強する強い動機だと妙に納得する。外国語を勉強する時には、強い動機付けが必要である。動機が強ければ強いほど、その学習は持続するし、学習効果も上がる。一人は日本との貿易を仕事としており、もう一人は日系の企業に勤めている。日本語が話せるからこの職業に就いたのか、この職業についてから日本語を勉強し始めたのか。あとでメモを持ち寄ってみると、こんな基本的な質問を、私たちの仲間は誰もしていなかった。つくづくインフォーマルなインタビューの難しさを感じる。

彼女たちと一番話が弾んだトピックは、芸能関係の話題であった。SMAPや反町隆史、竹野内豊など、日本で人気のある芸能人のことを知っている。それだけではない。日本で流行っている歌や、その時放送されていたドラマのことも、よく知っているのである。これ程までに日本のものがリアルタイムで香港に流れているとは、想像もしていなかった。彼女たちは、もし

かすると人によっては、日本人よりも日本のものをよく知っているかもしれないと思う。この様に、日本のテレビ番組をたくさん見ていることも、日本語を勉強する動機付けの一つではないだろうか。テレビを見るることは、視覚だけでなく聴覚も使う。日本語を耳にする機会の多い彼女たちの日本語の発音に、中国語を母語とする学習者に多い発音上の誤りを聞くことはほとんどなかった。

#### ⑤ 香港返還

香港は1997年7月まで、イギリスの植民地であった。香港返還の際は、その様子が日本でもメディアで大きく取り上げられた。人々は返還を喜び、中国国旗を振り、香港は返還のお祝いムード一色に染まった。それが、日本のメディアで取り上げられた香港返還の様子であった。私はそのことに何の疑問も持っていないかった。香港の社会人に返還のことを聞くことで、香港が受けたイギリスの影響とは何なのか、また香港独自のものは何なのかが分かる、と安易に考えていた。

しかし、いざ香港返還について尋ねると、私が予想していたように「返還されて嬉しい」と答えた人は一人もいなかった。ある人は一言、「興味ない」とだけ言い、またある人は、社会主義経済や法律への不安を語った。「返還の際、旗を振っていたのはアルバイトで雇われた人であるという噂がある」などと、ショッキングなことを教えてくれた人もいた。4人とも返還についての話題などしたくないといった様子で、話はすぐに別の方向へと向いてしまった。その反応から、私たちは香港返還について、肝心の香港人の意志とはかけ離れた所で考えていたのであり、この点で香港人の心の内に入していくのは難しいということに気がついた。私たちが学んだのは、香港人の意識を抜きにして香港返還を語るべからず、ということだった。

#### ⑥ おわりに

香港の社会人が語る香港。それは、経済面など、ある点においてはイギリスの影響を受けたものであり、食文化などのある点においては中国の文化を残したものであった。しかし、香港はイギリスでも中国でもない、独自の匂いと文化を持つ一つの国のようなもので

あるといった意識を、彼女たちは抱いているように思えた。彼女たちは、私たちが考えていたほどにはイギリスのことも中国のことも考えておらず、香港そのものをつきつけてきたような感じがする。それは、「国」といった枠にはまらない、香港の歴史がつくり出した独特的のアイデンティティであり、そういったアイデンティティをもって生きている人を前に、英國領だとか中國領だとかいう話をするのは空しいような気がした。それは誰が決めることなのだろうか？香港に住む人たちとは別の所で、香港の日常生活とは別の所で、もっと大きな事柄が決定されていく。しかし、その決定は、彼らの日常生活にも大きくおおいかぶさっていくのである。

## (2) 中文大学生 (The Chinese University of Hong Kong) との交流

### ① 香港の大学を訪れる

2月26日。香港に来てからずっと湿度が高いなと感じてはいたが、この日は湿度も最高潮に達していて、何と湿度95%。気温はさほど高くないようだが、今まで味わったことのないような蒸し暑さである。それでも、街行く香港人はいつもと変わらず颯爽と歩いている。

この日、私たちはまず道教で有名な寺院を訪れ、もうもうと立ちこめる香の煙に包まれることになった。香港の人々は大変信心深く、この日も大勢の参詣者で境内はごった返していた。新年などはとても歩ける状態ではないそうだ。香と供え物を手にした人々は、ちょっとでも隙間をみつけると、さっとその隙間に入り込み、地面に新聞を広げて早速お祈りを始める。お祈りが済むと、掃除係の人がさっとやってきて、新聞や供え物を片付ける。するとその後ろで、もう次の人が新聞と供え物を持って待っているという具合だ。そのすばやさ、ローテーションの見事さが香港らしい感じる。

自分たちだけで乗りこなすことができるようになった地下鉄を利用し、途中から電車に乗り換えた。といつても、8名が行動するとなると、キップを買うのに小銭がないとか、適当な紙幣がない、釣り銭の出る機械に行列ができるなどと、相変わらず大騒ぎになる。

彼女たちが考えているのは、イギリスでも中国でもなく、「香港」。そして「そこで生きる自分自身」のこと。彼女たちの心に秘められた「香港社会の未来への不安や期待」に、私たちはアプローチすることができなかつた。香港の社会人との話はここに述べたものにとどまらないが、普通の会話の中から私たちがそれぞれ聞き出そうとしたものが、彼女たちの本音であったかどうか疑問も残る。日本の大学生と香港の社会人との間の、「自立度」の大きなギャップだけが印象に残った。では、日本の社会人は彼女たちほど自立しているか。私たちが今回の会食で得た新たな疑問であり、収穫である。

藤田 幸

香港に来てから電車を利用するのは初めて。このまま乗っていけば、中国大陸の広東省に入ることができる。もちろん、入国ビザを持っていなければならぬが。

香港の電車は比較的きれいで、車内の色使いもシルバーと赤ですっきりとしている。日本の電車と違うなあと感じたのは、座席にクッション製のものを使用していないことである。ステンレスの座席はスルスルして滑りやすくハードな感じで、いつもと違う乗り心地がする。電車に乗ってから数十分が経過し、中文大学の最寄りの駅“ダイガク”に着いた。改札口を出ると、中文大学日本研究学科の児島慶治先生、そして、日本研究学科の学生である周さんと黄さんが私たちを出迎えていて下さった。

駅前に到着していた中文大学キャンパス行きのバスに乗り込み、大学へと向かう。中文大学は丘の上、と言うよりも山の上にそびえ立つようなかたちで建っている。この大学に毎日通う大学生はいい運動になるなあ、といった感じだ。バスは大学キャンパスのあちこちに止まりながら、丘というか山というかを登っていく。大学食堂はスタッフ用、学生用といくつかある。スタッフ食堂で昼食を済ませ（ここでも飲茶をいただいた）、司書の方の案内で図書館を見学し、キャンパスの頂上から全体を見渡した。あまりの急勾配にゼイゼイ言いながら階段を登ったのだが、山の上から見おろ

すキャンパスは穏やかな海（狭い湾となっていて川のように見える）と山に囲まれて、やすらぎにも似た気分にさせてくれる。はるか下の方に、日本研究科のあるビルが見える。とても歩いて降りる気にはならず、下りはバスにした。



中文大学キャンパスの一番上の建物からは海が見える。  
右下に見えるのが日本研究科のある建物

昼食時の周さん、黄さんと私たちの会話は英語であり、司書による図書館案内も英語であった。司書の方の英語はとっても早口。児島先生とは広東語で会話されており、英語と広東語とが交錯する会話がまたまた香港らしいと、側で見ていて感心した。

## ② お互いの大学紹介

日本研究科に入り、学生7名と交流する機会をもった。まずは、お互いの大学について紹介し合うことから始まった。香港中文大学を紹介するビデオを見、彼らが学内でどのようなことを学んでいるのかということなどの説明を受けた。私たちの大学紹介に移った時に、正直言って私は自分の在籍する大学についてあまり知識をもっていなかったのだなあと感じこととなった。海外に来て初めて自分の国についてどれだけ無知であるかということを知る、という話はよく聞くことであるが、私は自分の大学についての無知を思い知ることになったのである。大学紹介のビデオはもちろん、大学の盾や記念品など、もっとたくさんの紹介物を用意してほしい。中文大学からは盾を頂き、私たちからは季節がら、お雛様を描いた日本画の掛け軸を渡した。大学のパンフレットを交換したが、厚みが随分違う。

## ③ 香港の学生が見るアジア

経済的に発展している香港に住む学生たちは、私たちの住むアジアを一体どのように見ているのだろうか。交換した意見のなかから、彼らの考えるアジアについてここで触れようと思う。

第一に、日本について。彼らは、日本をアジアの中で一番豊かな国だと感じている。その理由として、日本が経済の中心地であること、そしてハイテクノロジーを有していることを挙げた。最も身近な話題としては、日本の若者のファッショングが挙がった。彼らは日本のこと “trendy” という言葉で表現した。これは、色彩面や、洋服のスタイルや組み合わせなどを意味している。香港に来て感じたことは、日本で流行った洋服を着ている女性の姿が目だっていたということだ。今年の冬、日本では黒やグレーが流行したのだが、香港でもこれらの色をファッショングを取り入れている人々が多かった。日本人の若者のファッショングを参考にしているのだろう。香港の街中を歩いていると、本屋が露天を出しているのをよく見かけた。そこには雑誌などが並べられていたが、雑誌の表紙には現在日本で売り出し中の芸能人ずらりと並んでいる。日本の芸能人の人気はかなりのものようだ。その他、さまざまな面で、香港の若者が日本に高い関心をもっていることが伺われた。

第二に、シンガポールと台湾について。彼らはこの地域にも注目している。その理由としては、日本と同様ハイテクノロジーを有しているということと、やはり豊かであるということだ。香港に来て感じたことであるが、香港に住む人々はかなりシンガポールに注目していることに驚く。また、台湾に関する関心が高いことも特筆されるべきであろう。日本ではあまり感じないが、アジアにおけるNIES諸国の地位はかなり高いものがある。世界の最新の情報が、アジアではこの地域に集まるといった人もいたが、そうやって厳しい世界情勢のなかで発展の道や生き残りの道を探ってきたからなのだろう。

さて、次にアジアがどうなっていくのか、日本と香港の関係は？といった話も交わされたが、英語での会話であったため、私たちの表現も拙く、また相手と十分に会話を続けることは難しかった。こういったレベ



「中文大学／山口県立大学は、こんな大学です。」

ルの話題をもっと自由に英語で話せること、私たち若者同士が意見を交換することは大切だとつくづく感じた。この交流は、私たち日本人学生が2つのグループに分かれ、香港人学生も2つのグループに分かれて、それぞれが小さな輪をつくって話し合うという形をとった。日本人、香港人といった具合に交代で座り、なるべく意見が飛び交うように工夫した。場の設定としてはまずまずだと思ったし、「もうそろそろ、この辺で終わりにしようか」と先生方が提案された時も、「もう少し時間を下さい」と言うほど話は弾んだのだが、やはり英語の壁は厚かったといえる。日本研究科の学生とはいえ1、2年生が主であり、まだ日本語はそれほど話せないということから英語での交流になると事前の打ち合わせがしてあった。私たちもそれなりに英語の準備をしていったのだが、実際に行ってみて、動機づけが甘かったという反省を得た。

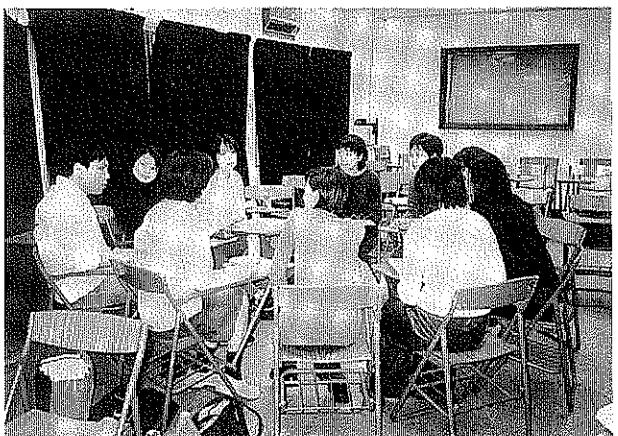
#### ④ 香港の学生の結婚観

お互いの結婚観についても話し合った。ゼミ旅行出発前に、シンガポールのオフィスで働く女性たちの結婚観についてのビデオを見た。彼女たちの結婚観は、私たちの結婚観と多少異なっていたので、香港の学生の結婚観についてとても興味があった。

結婚観について問題となったのは、「結婚しても、現在の仕事を続けるか？」ということであった。彼女たちは、口をそろえて“YES”と答えた。結婚したら仕事をやめるという考え方や、専業主婦といった言葉が残っている日本社会の反応とは大きく異なっている。私たち日本人の答は人それぞれであるのに対し、彼女たちからすると、この質問を私たちがすること自体に違

和感を持っているかのようであった。私自身の考えとしては、子どもができたら仕事はとりあえずやめるつもりでいたので、そのことを話したら不思議そうに私の方を見ていたのを覚えている。香港の学生と結婚観を話し合ってから、私の仕事に対する考え方方が少し変わったような気がする。「一生かかわっていけるような仕事を」と思い始めた。

しかし、一方で、彼女らの就業を支えている東南アジアからのメイドさんたちの問題を口にすることができなかつた。家事、育児をサポートしてくれる体制が日本社会でより充実するまでは、香港のようにメイドさんの力を借りることが出来ない私たちには、二重、三重のプレッシャーがかかってくる。それを香港の学生たちに英語でどう説明したらよいのか、言葉に詰まった。



「あなたの意見は どうなの？」

#### ⑤ 香港の学生と出会って

私が、香港の学生と接して感じたこと。それは、彼らが自分たちの将来設計をきちんと持っているということだった。日本の学生は、将来設計が曖昧でもとりあえず大学に進学する人が多い。そして、大学でいろいろと視野を広げていくうちに、自分のやりたいことを探していく、これが現在の日本の大学生の典型的スタイルではないだろうか。私たちが出会った香港の学生は、「将来日本の航空会社に就職したい」など、自分の将来を考えた上で日本研究学科を選び、この大学に通っていた。在学中に日本へ1年間留学した経験があったり、これからする予定である学生もたくさんいた。私もカナダに1ヵ月間の語学研修に行ったことがあるが、本当に言語を習得しようと思えば、“留学”す

ることは一番の近道だと思う。だから、彼らのより積極的な言語習得の姿勢をみてうらやましく思った。

今回私たちは彼らと英語でコミュニケーションをとったが、私たちが英語で四苦八苦しているのに対して、彼らはまるで母語を話すかのようなスピードで英語を話した。家庭では広東語で、学校では英語で教育を受けてきた彼らには当然のことであろうが、うらやましい感じがする。香港人の話す英語は、スタンダード英語と少し違っていた。例えば、“ランドマーク”を発音するときも、“ランマ”というように私たちには聞こえる。在香港日本人の方に聞いたところによると、彼らが英語を発音するとき、単語の最後に子音がきている場合は、それを発音しない人が多いらしい。その上、話すスピードがとても早いので、初めて会話をした時は聞き取りに少し戸惑った。スタンダードな英語だけでなく、世界の様々な人々の話す国際語としての英語にも慣れていいきたいと思う。

#### ⑥ おわりに

「異文化交流論研究室」、これが私たちの研究室の名

### 2-3. 私たちの見た香港

#### ① 香港の人はどこに住んでいるのか？

香港の夜は賑やかなイルミネーションで彩られる。夜遅くまで街の明かりは消えないし、人の歩みも止まらない。車やバスも動き続けていて、香港の人はいつも眠るのだろうかと不思議に思っていた。そのことについて尋ねてみると、香港の住宅事情に結びついた答が返ってきた。

香港は土地が狭く、一家に一軒という住宅構想は到底無理な話である。一家に一軒の庭付きの住宅とは夢のような話で、香港ではごく限られた本当にお金持ちの人にしか許されないものである。そのため、限られた土地の中に縦長いビルが空に向かっていくつも立ち並ぶことになる。どんなに後ろに下がってカメラを構えてみても、ビル全体を上から下まで写真に収めることは出来ないぐらい高く建てられている。香港の法律では、7階以上になるビルにはエレベーターの設置が

前である。ゼミの時間で、また自宅でと、さまざま本を読んだり、ビデオを見たりしてきた。少しは、「異文化の人々と接するということ」の意味を吸収してきたつもりだったのに、実際はまだまだあることを香港人学生との交流を通じて実感した。しかも、彼らはこんなにも「近い」海外に住んでいるというのに、まともにコミュニケーションがとれなかった自分が情けなかった。その理由は、言葉の違いもあるとは思うけれど、それだけでは絶対ない。私自身の彼らに対する姿勢に原因があったのだと思う。コミュニケーションの取り方は、もっといろいろとあったはずだ。私は、もっと「自分」をもたなければならぬということを彼らから学んだ。香港では十分な時間も無かったために、あっという間にお別れしなくてはならなかつた。けれど、電子メールのアドレスの交換をしたので、この出会いを大切にしたいと思う。

そして、彼らが日本に来る機会があれば、今度こそ本当の異文化交流を実現したい。

藤田 恵美

義務づけられている。しかし古いビルになると、その法律も適用外になってしまう。それでも家がない人はビルの上にさらに家を建てたりする違法ケースもある。しかも、一部屋に割り当てられる部屋の広さはあまり広いものとは言えないそうである。

香港の夜が賑やかな理由は、つまりそこにあるというのである。学校や仕事が終わってから、狭い家に帰るよりは外で過ごした方がいい。自宅に帰ってから夕食の支度をするよりも、外食した方が早くて安い。朝食も外でとる人が多い。こうした理由から、街は早朝から深夜まで動き続けているのである。空に向かって伸びる高層住宅。高級なものもあれば、老朽化したものもある。あの小さな窓の一つ一つに人が住み、空から香港の街を見下ろしながら生きている。ピクトリアピークなどでは空き家になった一軒家や売り家が目立った。香港をあとにした英國人や、裕福な香港人が住

んでいたところだそうだ。空になった庭付き一軒家と、人々を詰め込んだ高層住宅の対比は何なのだろう。

夜が遅いから、それに比例して朝の開始が遅くなるのかというと、答は違う。香港は、朝もまた早くから活動を始める。ホテルの窓から街並みを眺めると、それぞれが忙しそうに動いている。通勤途中の人は足早に歩き、屋台で朝食を取る人も見える。朝の散歩で公園まで足をのばした時は、太極拳をしたり、マラソンをしたりしている人々を見かけた。鳥かごを持って出て、鳴き声比べをしている人々もいる。植木や花に水をやったり、掃除をしたりする職員も見かける。

これらの状況を総合して考えてみると、確かに香港の人が自分の家で過ごす時間は短いと言えそうだ。しかも、大人だけでなく子どもまで含めてである。日本では夜中に出歩くこと自体があまり好ましくない傾向として捉えられているが、香港では幼い頃からごく当然の状況であるため、夜遅くなつたからといって叱られるようなことはないらしい。とにかく朝から晩まで動き続けているのが香港の人々である。香港の賑やかな雰囲気の裏には、この様な生活事情が存在するということを、今回私は初めて知ったのであった。

## ② イギリスと香港

香港がイギリスに統治された期間は150年間にも及ぶ。香港の街に残るイギリス統治の名残りに思いを馳せながら、街を歩いてみた。まず最初に見つけたのは、ビルの「センター (Centre)」という英語がイギリス式表記になっていること。しかし、それ以外には、あまり目立つものは見あたらなかった。地下鉄に乗って移動する時に、再びイギリスらしいものを発見した。地下鉄の吊革である。イギリスで目にした吊革と同じスタイルのもので、日本で見かける吊革とは全く異なっている。想像しにくいと思うが、ちょうど線香花火のように下のほうが丸くなつていて、その丸い部分を握るようになっている。香港に行って地下鉄を利用されるときには、ぜひ確かめてみていただきたい。また降りた駅の名前の一つが「太子」となつており、下の英語表示をみると「プリンス (・エドワード)」となつてている。プリンス・チャールズ・ビルというのもあ

ったが、現在は人民解放軍が使っているらしい。香港の地図を見ながら歩くと、地名や通りの名前が英語と広東語になっていて、まぎらわしい。広東語をそのまま英語に置き換えたのがほとんどだが、一部が英単語に置き換えられたものもある。

イギリスの滞在を終えてから再び香港に舞い戻ってくると、イギリスに行く前には見えなかつた香港を新たに見ることができた。香港最後の宿泊先となるBPインターナショナル・ハウスで宿泊の手続きを取ろうとフロントに向かうと、一人の女性が英語で応対してくれた。しかし、イギリスで受けた応対とのあまりの違いに私たちは驚いてしまつた。丁寧なサービスを心がけているイギリスとは反対に、いかに迅速に仕事を処理できるかを重要視している感じであった。イギリスを体験した私たちには、香港の英語表現も、ジェスチャーも、笑顔を含めた接客態度も、クールすぎるくらいに感じた。イギリスではplease～を伴うフレーズを何度も耳にしたが、香港では1度もなかつたように思う。その代わり、短時間に何人ものお客様をさばいていく。そういうた香港のスピードに加えて、香港の人々の話す独特の英語の訛りもあらためて感じた。アジアの人々が話す英語には、それぞれの国々の言語を基礎とした独特的の訛りがある。香港人が話す英語はホンギリッシュ、日本人が話す英語はジャパリッシュなどとも言われているらしい。私たちが香港人の話す英語を理解するのが少し難しいと思うように、私たち日本人の話す英語は、香港人には理解しづらいのかもしれない。

香港は、広東語と英語が飛び交う街である。地元の人、外国の人のそれぞれに対して素早く言語を切り替える。街で見かけたほとんどの場面で、2つの言語を耳にした。イギリス統治下において、香港がアジア地域における最大の自由貿易港として、または国際観光地として発達していくためには、国際語としての英語が必要不可欠だった。世界を相手とするには、英語の習得こそが早道であつたし、返還前の香港では英語による学校教育が実践されてきた。香港における英語はビジネスに直結しており、エリートへの道が約束されていることでもある。今後の広東語中心への教育移行によって、英語が限られた人たちだけの言語になれ

ば、私たちが香港で目にした貧富の差がさらに拡大するのではないだろうかと、少し心配になった。

ところで、私たちが見ることのできなかった香港に、新界（New Territories）がある。香港中心部をぬけて新界に向かうバスに乗ると、山や田圃など、開発の手の及んでいない土地もたくさんある。イギリスの影響の及んでいない新界をめぐるバス・ツアーや、農家などへのホーム・ビジットなど、香港の何所かにインフォメーション・センターをもつ香港観光協会で手軽に予約できるようになっていたが、時間の関係で果たせなかつた。水や食糧、その他多くの物が新界を

通つて九龍や香港島に入つてくる、いわゆる香港の生命線である。香港返還はもともと新界のみをさすのであったが、新界なくして香港は生き残れないということから、香港全体の返還となつたという。今回私たちが見れなかつた香港にはまた、白い砂浜とビーチが続き、イギリス人たちの保養地となつていたアバディーン、スタンレー、レパルス・ベイなどがある。こうしてみると、イギリス統治下にあつた香港も、実にさまざまであったことがわかる。香港中心部だけを見て香港を見たと思ってはいけない。これが、この旅で私たちが得た教訓だ。

## 2-4. 香港返還・香港回帰祖国　— それぞれの視点 —

藤田 恵美

1997年7月1日、香港は約150年間のイギリス統治から解放され、中国に返還された。香港では返還という表現ではなく、「香港回帰祖国」と呼んでいる。香港返還の年に香港にいた人々は、この「香港回帰祖国」をどのようにみたのだろうか。香港に在住する日本人と、香港の社会人および学生に対して、それぞれの視点から見た香港返還について尋ねてみたことを報告したい。

香港滞在の間、私たちの案内役を買ってでて下さつたのが、山口県香港駐在員の伊田さんである。伊田さんが香港駐在員として香港に赴任されたのは3年前のこと、香港返還前の状況を知つておられるし、香港返還が行われた1997年の歴史的瞬間に立ち合つておられたことになる。香港では返還前後の6月28日から7月2日までが国の休日（連休）とされ、香港の街は返還ムードで沸き上がつたそうだ。特に、イルミネーションの量がすごかったという。香港返還による変化は何かという質問に対しては、香港返還自体が変化の原因になりうることはなく、アジアの経済危機による不景気こそが問題であると言われていた。返還前後の変化の実際などについては、資料を下さつた。英國政府の任命する総督がいたが、政党結成が認められていた返還前。「港人治港」（香港は香港人によって治める）のスローガンのもと、高度の自治権を有する特別行政区となり、立法会をもつて自立したように見えるが、一党のみからなる中国政府が事実上管理するようになった返還後。香港返還・香港回帰

祖国前後の新聞を見せていただいたが、「人民解放軍進駐」をトップとする新聞が多かった。これは、香港の人々がイギリス植民地政策から開放されたことの象徴なのだろうが、そのウラにある香港人の心境は少し違うものであったことがわかつた。公用語については、返還前は「英語・中国語」とされていた。返還後は「中国語・英語」と、その優先順位が変わつた。経済体制については、返還後50年は返還前の状態を維持するとあり、これもまた気が遠くなるような話だ。国際協定については、返還前は香港として参加することはできなかつたが、返還後は「中国香港」として参加できる。さて、どちらがより良い状況といえるのか。歴史は後戻りしないのだから、返還後の中国香港が国際舞台で活躍するのを待つしかない。

香港の社会人や学生との話からは、香港返還で特別の意識の変化があつたということはないようだつた。その



香港返還・香港回帰祖国当日の新聞（号外）

理由の一つとして、香港返還の決定から香港返還当日までの時間的な「枠」の存在が、香港の人々の興味や不安をそこまで拡大させなかつたということが挙げられる。香港返還が決定されたのは1984年のことであり、実際に返還されるまでに13年間の時間的ゆとりがあった。また、香港返還の本格的な動きが見られ出したのはさらに前のことであり、10年も時代をさかのぼることになる。香港返還に対する不安から、一時カナダなどへ移住する人もいたようだが、時間的経過のなかでその不安を解決し、香港に舞い戻ってきた人も多くいるということだった。

香港の社会人との会食では、私は特に英語教育から広東語教育への移行を図っている中国政府の政策について感想を聞いてみた。私が話を聞いたボリーさんは中国政府の政策に反対の意見だと主張していた。その理由として、香港でのビジネスにおける英語の必要性を語ってくれた。香港のビジネスでは英語は必要不可欠のものである。それを現在の段階から広東語への移行を図ることは、いわゆる日本で私たちが英語教育で直面している問題にたどり着くことでもあろうと思った。広東語を第1言語とし、英語を第2言語としていくと、英語コミュニケーションの実践の場が失われ、上達しなくなってしまう。学校教育では高度な思考を扱い、また実践的な事柄も扱うので、それを英語で行うか広東語で行うかで、大きな差がでてくることだろう。ボリーさんは、ビジネスに携わる人々の多くは、香港が返還前にアジアの貿易港として重要な地位を築いたのにも関わらず、返還後に中国政府の政策によって香港の地位が下がってしまうことを心配しているといったようなことを話してくれた。

中文大学生の香港返還に対する感想も同じようなものであった。就職を目の前にした彼らにとって、英語コミュニケーション力は大切な就職の条件のようである。彼らは学校教育を英語で受けてきた世代であるから、広東語教育への施策の変更について現実的な実感はまだないようだった。広東語教育について心配の声を上げているのは、義務教育の年代の子どもをもつ母親らしい。数少ない英語教育の学校への進学を許可された子どもと、広東語教育の学校へ通学する子どもと、それぞれの将来がどのようにしていくのか、今後の課題である。

今回、香港の人たちの話を聞く機会を得て、私たちが目についていたテレビ映像、すなわち「香港回帰祖国」を祝う香港の人々が大勢旗を振っていた光景は、政府による操作によるところも大きいということを知った。イメージだけで描いていた香港返還に対する香港の人々の気持ちを少し知ることができて、日本のメディアだけから受け取る一方的な、あるいは断片的な情報で物事を判断することの恐さを感じた。現在、香港返還日は記念日として制定され、公休日（祝日）となっている。

香港返還か、香港回帰祖国か。150年という歴史のなかで、香港は英國でもなく、中国でもなく、まさに香港というアイデンティティを確立した。今回のフィールドワークで出会った人々や、香港で生き続ける670万の人々に不安のない明日がありますようにと祈らずにはいられない。

### 3. イギリスを知るための試み

イギリスに関する本は山ほどある。イギリスをどこから見るのが。歴史？ 文学？ 言語学？ アート？と、それらの本の山は私たちに問いかけてくる。イギリスに関する多くの本の中から「文化」を取り扱ったといえるのではないかと思われるものをリスト・アップし、その

中から出発前に読んでおくテキストを選んだ。イギリス礼賛型の本、イギリス批判型の本と、両方を入れるようにした。その結果、出発前に読もうと決めたテキストは、以下の15冊（順不同）。

- 「イギリス観察学」（不詳。貸し出して、ついにもどってこなかった！）  
「イギリス・比較文化の旅」 武本昌三 鷹書房弓プレス 1998年  
「イギリス文化への招待」 梁田憲之・橋本尚江編 北星堂書店 1998年  
「豊かなイギリス人：ゆとりと反競争の世界」 黒岩 徹 中公新書 1984年  
「イギリス式人生」 黒岩 徹 岩波新書 1997年  
「もう一つのイギリス：馬とテニスと野鳥と」 池田 博 連合出版 1986年  
「イギリス文化と国際社会：海洋国民の知的エネルギー」 小野 修編 明石書店 1996年  
「文明の表象 英国」 近藤 和彦 山川出版社 1998年  
「変貌する多民族国家イギリス：多文化と多分化にゆれる教育」 佐久間孝正 明石書店 1998年  
「イギリスは豊かなり」 田村 明 東洋経済 1995年  
「イギリス・シンドローム」 林 信吾 KKベストセラーズ 1998年  
「ゆとりの国イギリスと成金の国日本」 マークス寿子 草思社 1993年  
「イギリス人はおかしい」 高尾慶子 文藝春秋 1998年  
「イギリス人の表と裏」 山田 勝 NHKブックス 1993年  
「ビル・ブライソンのイギリス見て歩き」 古川 修訳 中央公論社 1998年

もちろん、全員がこれらを読破したわけではない。「イギリス観察学」は新書本で読みやすく、旅をするときにどこを「観る」かという視点を与えてくれるので全員が読むことにした。「イギリス・比較文化の旅」は、私たちが訪れるような場所で、作者が考えたことや見るべきことがエッセイ風に書かれており、これも共通図書とした。「イギリス文化への招待」は、言語や階級、国民性や民族問題、若者文化などの基本的な事柄を理解するための参考とした。その他は、みんなで手分けして読むことにした。

そうやって、イギリスのイメージを膨らませていったのだが、どの本を読めばイギリスがわかるということはなかった。タイトルと内容のギャップに頭を悩ませた本も多かった。断片的な情報で、判断に困る本もあった。結果的には、先に書いた2冊の本、「イギリス観察学」と「イギリス・比較文化の旅」の手法が、私たちのフィール

ドワークに近いということになった。短期間に多くの場所を早足でめぐる私たちの旅にフィールドワークという言葉は馴染まないが、せめてこれらの本で試みられた手法をお手本として、イギリスを観察するという目的で、私たちの旅を構成してみようということになった。この報告書では、主としてイギリスの人々の行動や思考について、私たちなりの観察結果を述べてみたい。

### 3-1. フェアトレードを通して

#### ① フェアトレードとは

2月29日、私たちは午前中にバッキンガム宮殿の衛兵交代式やロンドン塔などを訪れ、ロンドン観光に夢中になっていた。約束の時間に遅れそうになって、タクシーでオフィスへ。急いで駆けつけたものの、約30分遅れの到着となってしまった。フェアトレードの事務所があるのは、静かな住宅街の一画。オフィスがわかりにくいのではと心配して、ジュリアさんは事務所のビルの前に迎えに出てくれており、私たちに優しい挨拶をなげかけてくれた。オフィスの中に入って簡単に自己紹介をすませたあと、私たちは翌日にリーズのCivic Hallで行われるフェアトレード会議参加の準備のために、お話を聞かせていただいた。



フェアトレード・オフィスにて

フェアトレード（公正な貿易）とは、ヨーロッパで始まったAlternative Tradeの動きであり、既に60年代からオランダでは学生運動の影響を受けて、一次産品を取り扱う貿易がなされてきた。また、イギリスでもOxfamが手芸品中心の店を展開し、不平等のない取引や、南北問題を考える貿易、南の人々に適切な利潤をもたらす貿易交流や開発協力、消費者の意識を改革する教育活動などの運動を進めてきている。日本では、第三世界ショップなどの活動が有名である。フェアトレードでは世界中を回って利益を得ていない人々を探し、一緒に働きながら工芸品を作り、売れる水準になった工芸品を持ち帰るルートをつくるというやり方をしていたが、実際にはそれらの製品の知名度が低いために購入する人が少ないという問題があった。また、フェアトレード関係者が訪れるうことのでき

渕上智美

る場所が限られており、活動が制限されてしまうといった問題もあった。その他、大企業からの妨害、フェアトレード活動への偏見やステレオタイプなどもあって、その普及は徐々にといった具合であった。

ところが、近年の地球的課題に関する一般の人々の関心の高まりは、フェアトレードに光を当てる結果となった。そこで、個別に行われてきた活動をまとめる必要性が生まれてきて、1988年に初めて正式な団体としてのフェアトレードが設立された。フェアトレードはチャリティー団体（NPO）で、世界的にフェアトレードをとりまとめる機関であり、オランダやドイツなどのヨーロッパ諸国に置かれた事務所が連絡をとりあっている。企業と契約を交わして、オレンジジュース、コーヒー、蜂蜜、チョコレート、紅茶などの商品にフェアトレード・マークをつけて売る。契約によって、企業からの賃金が現地の生産者や労働者に正しく還元されているかが監視されることになる。従来、一般市場で売られている商品の場合には、生産者に利潤はわずか数パーセントしか与えられないといったケースが多かった。例えばコーヒーの豆の場合、生産者は厳しい条件のもと、山奥で働いているため、バイヤーが街からわざわざ出かけてきてそのコーヒーを安い値で買って帰るしくみとなっている。生産者には情報が届きにくく、言われるままの値段でコーヒーを提供していた結果、不公正な代金しか支払われず、生産者は最下層の暮らしに追い込まれたりしているのだとう。そういう結果を生まないように、また増やさないようにするのが、フェアトレードの役目なのである。

特定の企業と提携し、その企業が公正な貿易をしている場合には、フェアトレードのマークを商品につけてもらう。フェアトレードでは企業と取り交わした条件が守られているか、現地調査に出かける。また、フェアトレード独自の商品も開発し、販売ルートにのせる。最近まで関心を示さなかった企業も、「地球に優しい」とか「環境に優しい」とかいう企業のイメージづくり、また「持続可能な開発」や「南北問題にチャレンジする」企業などのイメージづくりのために、フェアトレードに関心を示す数が増えてきたという。そ

れは、消費者の消費行動や意識の変化によるところが大きいようである。消費者がフェアな貿易を行う企業の商品を購入する傾向が明らかになり、企業としてもこの問題を避けて通れなくなっているようである。イギリス政府も、こういったフェアトレードの動きを支援するようになってきており、今回のフェアトレード会議の幕開けは、ビッグ・ベンで知られる国会議事堂で行われた。フェアトレードの運営は、企業との提携、寄付やチャリティー、他のより大きな団体（Christian Aids や Oxfam など）からの助成金、フェアトレード商品の利益などで賄われているという。

## ② ファーマーと出会って

それでは、フェアトレードの活動によって、本当に生産者の暮らしは良くなっているのだろうか？これは、私たちが一番最初に疑問に思ったことであった。答は、イエス。それは、リーズで開催された会議に参加して分かったことである。会議では、まずフェアトレードの近況報告がなされ、次に中央アメリカのベリーズから、チョコレートの原料となるカカオ農家であるカルロスさんのお話と、アフリカのウガンダから、紅茶農家をまとめる団体長のキナンガさんのお話があった。2人とも力強い英語でスピーチを行い、早口で進むスピーチを聞き取るのは大変だった。マヤ族の末裔でありカカオを栽培するインディヘナのカルロスさんは、「こんな訛りのある英語で失礼」と言っておられたが、とても筋道だった素晴らしいスピーチだった。カカオ豆の販売価格について長い間大企業に搾取されてきたということが、フェアトレードと取引するようになってから分かったそうである。正当な利潤を得

るようになってからは、手に入れたお金でセメントなどを購入して家を改築したり、子どもを学校へ行かせたり、少しずつではあるけれども生活が改善してきているようである。特に、子どもたちを学校に行かせることで、文字の読み書きができる、市場の情報も入手できる賢い農民を育てなければ、と言われているのが印象的であった。みんながそうなってほしいけれど、村のなかにはカルロスさんのようにフェアトレードを信じる者もいれば、信じない者もいる。けれど、カルロスさんのような農家が豊かになるのを見て、取引先をフェアトレード関係の企業に代える農家が増えてきているようである。そうなると、村の人々の期待を集めるフェアトレードの責任はまた一層重くなる。



ウガンダの紅茶生産工場長、キナンガさんと一緒に

一方、キナンガさんは紅茶工場の工場長のような地位にあり、その団体が栽培する紅茶の品質管理や、紅茶を製品として輸出できるように袋詰めをするまでの工場の運営など、大きな責任がその肩にかかっている。こちらの方は一軒一軒の農家で個別に利潤を得るのではなく、団体としてまとめてフェアトレードを通しての利益があるから、工場での賃金や紅茶栽培の賃金を正当なものにしたり、労働者福祉に取りかかったりと、いろいろできるようになったと言われていた。そうは言っても、農家毎には生活レベルに差があるのは事実だそうで、例えば、それは紅茶であれ、コーヒーであれ、地域毎にその土地に適した品種を作るので、品種の種類によって価格に差が出てくるからだそうだ。高く取引されるものは特定の土壌や土地でしか育たないので、そうなれば生産者が手に入れる賃金にも差が出てくることになる。それでも、ただ単にバイヤーに言われるままの代金を支払われて、最貧の生活



ベリーズのカカオ農家、カルロスさんと一緒に

を余儀なくされていた頃に比べると、自分たちで自立して物事を進めることができるのでやりがいがあり、収入も増えてきているということであった。

### ③ 味見をする

この会議を通して、私たちがフェアトレード商品を買うことによって、生産者がよりよい暮らしができるようになるということがよく分かった。フェアトレード商品には、チョコレート、コーヒー、ココア、ティーなどいろいろなものがある。価格はブランドものより少し高めであるが、味は変わらないように感じた。しかし、消費者はろくに味見もしないで、単にブランド・ネームがついている方の商品が良いと判断し、なかなかフェアトレードの商品に切り替えてくれないそうである。

スピーチのあとで、味見の時間があった。コーヒー やチョコレートをいただいた。ファーマーのカルロスさんやキナンガさんとも実際に言葉を交わしてみた。マヤ文明の末裔の人と話をするなんて、ちょっとドキドキ！ 「これからこのチョコレートを食べる時は、カルロスさんの顔を思い浮かべながら食べますね」などという話を交わした。フェアトレードの多くの商品には、現地のファーマーの顔写真が載っているから、「あー、この人が作ったのか...」と親しみが湧くし、大切に飲もうとか食べようとかいう気がしてくる。ただ美味しいというだけではなく、生産者がその厳しい労働条件に値する正当な収入を得ることにもつながると学び、フェアトレードの考え方方に興味が深まった。

フェアトレード会議が終了してホールを出ると、外には私たちの心の中と同じくらい爽やかな夜風が吹いていた。Civic Hallの天井や階段などのインテリアは重厚なものであり、イギリスらしい紋章がいたるところにデザインのモチーフとして使われていて、こんな所に私たちが足を踏み入れてもいいの？と躊躇したくらいだ。が、これはリーズ地域の失業対策として行われた事業で、失業者が建築にたずさわった「名誉ある建物」なのだと警備の方が教えて下さった。

### ④ キャンペーン活動

フェアトレードでは、イギリスの消費者にもっと商

品を購入してもらい、フェアトレードを支えてもらうためのキャンペーン活動を展開している。その一つはテレビの料理番組や、カルチャー・センターで行われる料理教室で、フェアトレード商品を使ってもらうPRをすること。例えば、チョコレート・ケーキやコーヒーを使ったデザートなどを作るときに、フェアトレード製品を使ってもらう。そして味を見てもらう。一般的の商品と同じならば、活動のコンセプトを説明して、できるだけフェアトレード商品を買ってもらうようにPRする。生涯教育の場での学習会や講演会、ワークショップなどもイギリス各地で展開しているそうである。リーズで開催された今回の会議でも、こういったキャンペーンに参加してフェアトレードを知り、それからファンやサポーターになったという一般消費者の姿が目立った。普通の人がたくさん参加する会議といいうのもおもしろい。

イギリスの大型スーパーの理解を得て、たいていのスーパーでフェアトレード商品が並ぶようになってい るから、あとは一般の商品と同じ棚に並んだ時に、こちらを選んでもらうようにしむけるためのPRが必要なのだという。大手の商品は、テレビその他のメディアで大がかりな宣伝がされ、消費者を惹きつける手が打たれている。一方、フェアトレードはそういう宣伝・広告にかける資金がない。近年までは、特別のショッピングや健康ショップなどでだけ売られていたが、それでは知名度が低いままだということで、一般的のスーパーに置いてもらえるよう努力したのだという。一般的のスーパーの棚に置いてもらうことで、「認められた」商品であるという信用も得ることが出来る。まさに good idea だ。

さまざまなアイデアを出しながら活動を展開しているフェアトレードのオフィスは小さなものであったが、そのバイタリティーは大きい。EUというネットワークを通じて、フェアトレードはヨーロッパにより発展していくことと思われる。「小さいけれども、日本にもフェアトレードがあるから連絡してみて」と言われ、フィールドワーク出発前に山口市で開催された開発教育ワークショップのことを思い出す。「そうだ、山口でも関わるんだ」と、イギリスにやってきて初めて実感したというのも、外に出てみて内を知るというこ

とか、と思う。フェアトレードについて、卒論でもつと詳しく調べてみようと思った。

## ⑥ おわりに

イギリスでは早くからチャリティー団体が、人道的な立場からの活動を行ってきてている。国内、国外に目を向け、できる人ができない立場にある人に、持てる人が持たざる立場にある人に支援の手を差し伸べようという精神で、国内外にネットワークを広げている。フェアトレードもそんな活動の一つである。私たちがあちこちで飛び込んだお店、ボディ・ショップも、公正な貿易を目的の一つに掲げ、また動物の権利を守るために医薬品や化粧品などの動物実験を否定し、化粧品のボトルのリサイクルなどにも取り組んでいる。そういう品物を選ぶことで、消費者もこれらの運動を支援できるしくみは、多くの人を自然に巻き込むのに効果的である。フェアトレード会議に「普通の人」がたくさん参加していたのも、こういった消費者をめぐる問題に一般の人々が高い関心をもって関わっていることを示す。

そういった地球環境や南北問題などへの関心は、まだ主流ではない。フェアトレードでは、大企業から政府への圧力がすごいため、そんなに簡単に市場や経済機構が変わるとは思えないとも言っていた。しかし、私たちがイギリスで発見したのは、「どうせ自分一人

がやっても何も変わらないのだから」という姿勢ではなく、「他の人たちがやらなくたって、私はこれが正しいと思うから、私はやる」という非常にポジティブな考え方と行動だった。この国民性は、明らかによく指摘されるところの日本人の国民性と異なっている。それはなぜなのか？

テレビで放映されている英国皇室をもじった番組のようなものが日本で行われたら、不真面目・不謹慎だと放映禁止になるかもしれない。フットボール・ゲームの初めに流される英國国歌は、スコットランドでは人々のブーイングにもみ消されて聞こえないそうだが、そんなことを日本ですると罰せられるかもしれない。イギリスでは、バスや列車に犬が半額料金で乗れるのはなぜ？ 乳母車をバスにもちこめるようになっているのはなぜ？

自転車を列車に持ち込めるようになっているのはなぜ？ なぜ？なぜ？の疑問は、旅を続けるにつれて増えていった。社会の中で何を優先に考えるのか、またあることをやって良い・いけないと規定する権利があるのは誰なのか、一度規定されたがおかしければ、それを変革する試みを社会の一人一人が考えているか・任せにしているかなどによって、イギリスと日本の差は出てきているように思う。日常の何でもないと思われる事柄を主体的に考える大切さを、フェアトレードを通して学んだと思う。

## 3-2. サリー大学一日体験

### ① はじめに

日本を離れ1週間、私たちはイギリスにいる。3月3日、サリー大学訪問のため早起きし、ホテルでいつものようにテレビのスイッチを入れたら、日本の雛祭の風景が目に入った。さすがに私のような外国人でも日本のことが懐かしくて仕様がなかった。さぞかし同室の優子さんもホームシックにかかったのでは。

サリー大学の訪問は午前9時の予定だったが、ロンドンの朝の通勤ラッシュのことを考えて一時間半前の7時半にホテルのロビーをあとにした。サリー大学の訪問では、主としてグローバル・スタディーズや多文

### 間 天 暈

化教育、留学生向けの英語教育などの状況を調べるのが目的である。私たちのなかで、これらの項目をそれぞれ担当する班はすでに決まっており、フィールドワークに出かける前からしばしば打ち合わせを行っていたが、結局みんなの意見もまとまらないままの出発となってしまった。

一日というのは短いようで、結構長い時間もある。朝から夕方までをイギリスのキャンパス内で過ごしてみて、英語漬けになって、ともかくイギリスの大学生活を体験してみようというのが、この日の大きな狙いであった。

## ② キャンパス見学

ホテルを出て地下鉄とバスを利用し、およそ一時間でサリー大学に着いた。約束の時間よりちょっと早かったので、図書館の入り口にあるカフェで一休み。大学図書館でカフェオレを飲むというのもシャレている。このような正式な訪問の場合、約束の時間より早く着くことがあっても、遅れることは絶対禁物。これは去年フィールドワークを行った先輩たちが教えてくれた教訓である。ジャカルタでの交通渋滞からの教訓だったが、ロンドンの交通渋滞もけっこうなものであった。

最初に応対してくれたのは、背の高い助手のマークさん。彼の案内で、キャンパスを見て回った。彼の話によると、このキャンパスはサリー州にある大学本部と区別するために、ローハンプトン・インスティチュート・オブ・ロンドン（Roehampton Institute of London）と呼ばれるロンドン分校である。ローハンプトンは、さらにDigby Stuart, Froebel, SouthlandsとWhitelandsの4つのカレッジからできている。それぞれ2マイル（3.21キロ）位しか離れていないところにあり、10分ごとに走る大学のミニ・バスで結ばれている。ローハンプトンはテムズ川を超えたところに位置し、ロンドン郊外にあたるということもあって、ロンドン市内の騒々しさがなく、またキャンパス内の空気もおいしくて、ロンドンにいることを暫く忘れさせられる綺麗な場所であった。

## ③ 大学寮について

見学したキャンパスの中で、私は寮のことに一番興味を持った。というのは、私はかつて本校の寮に2年間お世話になったことがある。4人部屋でプライバシーは全くと言っていいほどなかった。安さが唯一のとりえだった。果たして、ローハンプトンの寮はどうなっているのだろう。寮はキャンパス内のいろいろなところに分散していて、どれも個室である。プライベートな空間だから、寮生の生活する内部までは見せてもらえないかったが、外から見た限りとても清潔感があって、住み心地が良さそうなところであった。寮と寮の間には芝生が広がっている。自炊できるように個室にキッチンが備え付けてるものと、寝室しかないも

のの2種類がある。後者の場合、5、6名で共同のキッチンがついている。料金はもちろんキッチンのついている方が少々高いが、それでも週に65ポンド（約13,000円）。アパート代の高いロンドンでは、学生寮は安く便利。今は、全校生徒7,000人中、約1,000人がキャンパス内の寮を利用している。留学生は優先的に寮に入れるシステムとなっている。

## ④ 大学図書館について

そして、もう一つ感心したのが図書館であった。そのスケールの大きさと整った設備にただただ驚くばかりであった。スケールが大きいというのは、分校というのに4階建ての建物全部が図書館だったからである。書物だけでなく、オーディオ・ビジュアル室や、卒業論文や学位論文室などがあり、4階のコンピュータ室はいつも生徒でいっぱいだという。ただインターネットを利用するだけの人もいれば、レポートを作成する人もいる。ここでレポートを作成すると、でき上がったものは1階で印刷し製本することができるという利点があるから、利用する人が多いらしい。24時間空いているので、真夜中だって徹夜でレポートを仕上げることもできる。こんなに設備が整ったら、レポートも進むんだろうと思う。

## ⑤ Global Studiesについて

キャンパス見学後、訪問目的の一つであるGlobal Studiesの先生に会った。私たちは、International Officeにある一つの小さな教室に案内してもらった。話を下さったのはGlobal Studiesというコース（大学院の修士課程）のコース・リーダーである。教授は大変多忙な方だったので、私たちが話をすることのできる時間はわずか30分間だった。教授が到着するすぐに、優子さんが慣れた手つきでテープレコーダーを素早く用意してくれた。しかし、先生の近くにそれを置くための机などがない、「手元に置かせていただけませんか」などとお願いする勇気もなかつたので、ちょっと離れたところで録音を始めることにした。出来上がったテープはやはり雑音が多くて、聞き取りにくいものだった。これは日本帰国後、テープの掘り起こし作業を行うときにかなりの支障となつた。

前述のように、ローハンプトンには4つのカレッジがあり、Global Studiesはその中の一つSouthlandsに拠点を置いているから、教授は私たちのインタビューのためにミニバスで来て下さって、その後すぐに自分のキャンパスにもどらないとなならないということだった。Global Studiesでは今までの学部レベルのコースであったものを発展させ、今年の9月にMAプログラムを発足予定である（学部では100人位いる。MAプログラムは10名程度となる）ということだった。それだけ、イギリスでもこの分野のニーズが高いということか。メディアやインターネットの発達によって、情報のボーダーレス化が進み、今日の世界はもはや国家単位でなく、地球規模で発展を遂げている。しかし、人口の急増、地球環境の悪化、南北間の経済格差や民族紛争といった課題はまだまだ数多く残っている。それらの問題を解決するには、社会学、経済学、地理学、環境保護、社会政策などの分野で活躍できる人材が必要である。これらの人材を育成し、各学問分野間で協力的に仕事をできるよう諸能力や資質を開発し、引き延ばすことがMAプログラムの目的だそうだ。学部卒業者の中には、行政機関やビジネスセクターで活躍する人もいるという。そういう人々がより高度な実践力を身につけるために、MAプログラムを組んだのだという。

Global Studiesには特に南北問題のことが含まれており、地球的視野で物事に対処できる人材の育成に力が入れられているという。開発途上国での実習があり、そこで得た経験を今度は国内に応用する実習もある。イギリス国内や先進国にも、それぞれの国内に南北問題がある。失業者やスラム状態になった都市部、移民の人々の間での経済格差や社会保障制度の格差など、まだまだ考えられなければならない課題は多い。行政やさまざまなチャリティー団体に出向いていって、国内の諸問題と具体的に対応するなかで、またあらためて国際的な諸課題を考える新たな視点をつかんでほしいというのが願いだそうだ。こういう実践的視点がイギリスらしいと、先生がコメントを加えた。そういうえば、日本国内にある南北問題、例えば農村と都市の格差や、中央と地方の格差は、私たちが考える以上に深刻なのだと聞いた。日本国内の研究が国際的な

研究の基盤としてなければ、地に足のつかない研究になってしまうのだということをあらためて知られた。

#### ⑥ 留学生への英語教育について

Global Studiesのインタビューを終えたあと、私たちはEnglish Departmentへと向かった。そこで、留学生向けの英語教育の実態を体験してみることになっていた。実際には3人と4人の2つのグループに分かれ、グループ毎に2つのEnglish Language Classを行き来し、授業を受けてみるという方法を取った。

私は、柳谷香苗さん、藤田幸さんと同じグループで、最初に向かったのは初級クラスであった。1クラスの生徒数はおよそ10人ぐらいで、その日出席していたのは日本人留学生2人、韓国人留学生1人、中国人（台湾人を含む）留学生4人とアフリカからの留学生1人であった。イギリスに来て約半年になる留学生たちである。教室は少人数クラスに合ったサイズで、先生と生徒が四辺形を囲むように座っていて、語学を勉強するには良いコンディションだと言えた。授業内容は、この一週間に受けた授業と、今進行中のプロジェクトの進み具合の報告であった。初級クラスとはいえ、全員自信に溢れていて、英語をとても流暢に話していた。留学するにはこれくらいの英語力が必要なのだということが分かった。現在進行中のプロジェクトというのは、英語でのエッセイ。何冊か本を読んで文献考察をし、さらに自分の意見を加えるというエッセイであるが、英語らしい構成と表現で書けるようになるために、様々な注意事項が与えられていたし、留学生たちは分からないところについて納得いくまで教師に質問をしていた。

次に訪れたのは中級クラスで、生徒数は10人。5人ずつに分かれて座っていた。日本人留学生も2名いた。中級クラスの授業では、小説を読んでその登場人物を分析するというレベルの高い教授方法であった。ワークシートに記入し、話し合い、また読み進めるという。進んで発言する人、黙り気味の人とあり、自分でどれだけ話そうとするかによって差がつくであろうことが予想された。毎日午前中は英語の授業、午後はそれぞれが選択する授業科目を受講するので、課題の量も多いことだろう。眠そうな留学生もいた。

午前9時から英語漬けになって3時間。昼食の頃には、私たちの頭の方もすっかり飽和状態になり、口を開くのもおっくうになるほどの疲れが出てきた。英語を聞こうと集中すると、頭痛までしてくる。英語、英語、エイゴ、エイゴ……。英語だけの毎日を送る留学生に悩みやフラストレーションなどはないのか。日本人留学生に質問してみたかったが、私たちがスタッフ食堂にいく時間になっても、留学生のための英語の授業は終わる気配がなく、ついに質問してみる機会を失ったのが残念である。

#### ⑦ 多文化教育について

スタッフ用のカフェテリアで昼食をとったあと、Froebelカレッジ長のレイエン・フォード先生が私たちを迎えて下さった。彼女はベージュのスーツをまとい、見た感じ50代で、とても魅力的なキャリアウーマンといった感じがした。

教育学について説明を受け、教室を見てまわり、Froebelの公文書保存所に足を運んだ。このカレッジの名前の由来は、教育学で有名なフレドリッヒ・フレーベルで、イギリスでいち早くフレーベル教育研究を始め、その後モンテッソーリ教育なども進めたのだという。フレーベルは、18世紀ドイツ生まれの教育学者である。‘Kindergarten’（幼稚園）という言葉及びその概念は、彼の発明であった。Froebelの公文書保存所には、フレーベルに関する貴重な資料や書物が保存されている。当時の学校におけるフレーベル教育やモンテッソーリ教育の写真を見たり、恩物などの道具も手にとらせていただいた。このカレッジの自慢は、イギリスで一番多い数の小学校教師を世に出したことだそうだ。また児童文学研究も有名で、日本からは特にこの分野を研究しにくる留学生が多いという。

その後、レイチェル・メイソン先生から多文化教育について講義を受けた。イギリスで行われている多文化教育について、また多文化研究の方向、日英共同研究などの話である。先のレイエン・フォード先生も、このレイチェル・メイソン教授も女性。その他、大学内で女性の教員スタッフに多く出会った。きれいな英語であるが、早口（いつもより随分ゆっくり話そうとしてくれてはいるのだが）であり、また高度な語彙がボ

ンポン飛び出すので、なかなかわからない。録音だけが頼りとなる。英語漬けでほとんど「ボー」とした状態になっている私たちにむかって、「オーケー、あとで岩野先生に聞いといて」と笑顔を向けてくださった。

#### ⑧ ディナー・パーティー

次に、「ディナー・パーティー」というプロジェクトを見た。これは有名なアーティスト（ジュディ・シカゴ）の作品、「ディナー・パーティー」をもじったものだ。彼女は、女性が「女性建築家」や「女流作家」などと呼ばれることを問題だとし、また芸術の歴史において女性が様々な作品の「モデル」として扱われる側に立ってきたことを問題だとして、男性の視点からだけ見た歴史（芸術史、文化遺産の歴史など）を異なった視点から見直そうと呼びかけた。そして、社会に貢献した数多くの女性をセレブレイト（celebrate）するためのディナー・パーティー（女性による最後の晩餐）を作品に仕上げて、世間をあつといわせた人である。

そこで、このプロジェクトでは大学中の女性スタッフに声をかけ、自分が一番尊敬する女性をテーマに、その人を招くためのテーブル・セット（テーブル・マットやお皿など）、あるいはその人を象徴するテーブル・セットをデザインして持ち寄って、大学全体で一つの作品に仕上げようということがなされつつあった。テーマに選ばれた女性としては、私たちがロンドン塔で文字を見たレディー・ジェーン（9日間王位につき、16歳で処刑された女性）や、有名な歌手、名もない炭坑労働婦（私の一番欲しいものは「青い空」、未来的な女性たちが私のような目にあわなくてすみますようにと訴えた）など様々あり、お互いに「こんな女性もいたのね」とか「あなたはこんな女性を尊敬していたの」とかという情報校交換の場にもなっているという。こうやって女性の歴史を掘り起しながら、職場のネットワークづくりのきっかけとするアイデアは素晴らしいと思った。「イギリスの大学では女性の数がまだまだ少ないし、地位も低いので、こうやって大学内の女性スタッフの連携も強めていきたい」と、プロジェクト・コーディネーターが話してくれた。

それぞれ自信に溢れるスタッフに触れて、「自信」というものはどうやってできていくのだろうと考えた。

自信があるというのは、個人が確立しているというか、自己の主張するものがあるということなのだろうか。主張できる自己があるというべきなのか。それと同時に、連携や信頼といったものについても考えさせられた。

### ⑨ おわりに

1日の大学体験が終わって、正直言ってホッとした。「英語で授業を受けるなんてとても無理」と、今後のさらなる英語力アップを誓ったのだが、日本に帰つてみると現実感がない。一見静かに見えて、内部ではとてもエネルギッシュなイギリスの大学に触れてみて、日本の大学生活が物足りない感じもする。何が原因なのだろうか。

一つには、日本の大学施設・設備の貧しさがあるだろう。国立大学や公立大学の教室は画一的なただの「空き箱」であり、高校の延長のような教室のデザインでは、学問をするという動機づけになりにくい。イギ

リスの大学では、大講義室やセミナーのための小教室、オーディオ&ビジュアル室、学部単位の資料室、スタディ・ルーム、学生が集まる場所、散策する場所、娯楽の場所、いくつもの食堂やカフェテリアやバー、24時間オープンの図書館とコンピューター室、語学センター、何棟にもわたる寮、カウンセラー室やクリニック、毎日のようにコンサートや演劇の行われる学生会館などなど、キャンパスが充実していた。どんな貧しい場所でも学問はできると言わればおしまいだが、日本の大学の貧しさについては、例えば東アジアや東南アジアなどからの留学生からも指摘されていることである。

やる気のない大学生が多いのは事実かもしれないが、やる気があっても、そのやる気を失わせてしまいがちな日本の大学の実状を、今回の一日大学体験だけからでも垣間みることができた。環境次第ではやる気も開拓されるし、持続できる。サリー大学で得た私たちの「やる気」が、日本に帰ってきた途端しぼんでしまったのは、私たちだけのせいではないと思うのである。

## 3-3. スターリン大学日本研究所

### ① はじめに

外国語として日本語を学ぶ人は、東アジアの人人が圧倒的に多く、ヨーロッパでは比較的少ない。そのヨーロッパの中では、イギリスは日本語学習の盛んな国であり、日本語教育機関数は世界第6位という位置にある。スターリン大学は、スコットランドで有名な日本語学科を持つ大学である。読者は、スターリン大学の日本語学科を訪問することが、なぜイギリスを知るための試みになるのだろうかと思われるかもしれないが、私たちはこの訪問を通してイギリス人の日本語学習熱に直接接してみたいと考えた。

教育は、人間にとて最も重要なアクティビティーの一つである。今日のようなグローバル社会においては、「国」という枠を越え、地球規模で物事を考えたり行動したりすることも少なくない。言語や文化など、自分の民族や国以外のこととも知り、考える教育がなされる必要がある。そのような必要性のある今日、イギリスでは外国語教育がどのように行われ、それが實際

### 中村 幸恵

にどのように役立っているのだろうか。中でも、私たちの母語である日本語がどのように勉強されているのかを知りたい。そう考えて、スターリン大学日本研究所にアポイントメントをとったのである。

### ② スターリンの学生は、どのように日本語を勉強しているのか？

3月4日、私たちは国内線を利用してロンドンからグラスゴーまで飛んだ。それから列車とタクシーでスターリン・ユースホステルまで行き、荷物を置いてから、スターリン大学の日本語研究所を訪ねるためにスターリン大学へと向かった。朝早くからの移動続きで疲れがあったが、スコットランドに来たという感覚と、列車からみる自然の美しさ、また緑のなかに立つスターリン大学キャンパスの魅力に、少し生き返ったような気がした。

教室に案内されると、日本研究所のHeadであるクランプ教授が入ってこられた。日本人の扱いに慣れて

いるだけに、非常にゆっくりした口調の英語で、資料を参考にしながら、とても丁寧にスターリン大学や日本研究所、日本語教育について話してくださいました。それによるとスターリン大学では、1970年代に日本語科への興味が持たれ始め、1980年代に日本語研究科が設立され、1989年に日本研究所としてスコットランドの中心的存在となつたそうだ。エジンバラ大学にも大きな日本研究科があるが、助成金を受けてスコットランド・センターの名乗りを上げたのはスターリン大学の方だった。

Japanese Studiesコースでは、1年生で「日本語I・II」と「東アジア（日本、中国、韓国）の歴史と文化」を学ぶ。2年生では、「日本語III、IV」と「現代の日本の観点、または日本政策の現代の問題」を学習する。3年生になると、東京や大阪などの日本の提携大学で学習する（これが「日本語V、VI」にあたる）。6ヶ月の日本留学は義務となっており、一年間留学する学生もいるという。主として東京近郊の大学へ留学するそうである。6ヶ月しか留学しない学生は、残りの期間は現代の日本の教科書を読んだり訳したりするのだそうだ。さらに、日本留学を終えた4年生では、「日本語VII、VIII」と「日本語の解説、論述」を行い、研究論文を仕上げる。学生の日本語能力は、イギリスの大学の日本研究学科のなかでも非常に高い方だとう。

#### ④ 長谷川先生とお話しして

現在実際にスターリン大学で日本語を教えている日本人教師である長谷川先生が、気さくに私たちの質問に答えて下さった。長谷川先生は、見たところ40代の女性。授業風景をビデオで見せていただいたが、人気の高そうな授業ぶりである。実際の授業を見ると時間がかかるからと、わざわざ何週分かをビデオにとって、早送りをしながら全部が見えるようにしてくださいました。長谷川先生は、1年のクラス（少人数制で、1クラス14名程度）を教えるとき、3ヶ月過ぎたら授業の中ではすべて日本語で会話している（直接法を使っている）とのことだった。日本語の授業は週6時間あり、そのうち3時間は会話である。漢字もひらがな

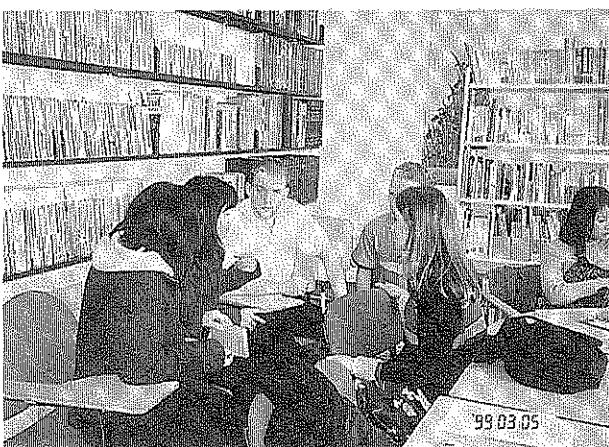
もでき、フラッシュカードなどでパターン・プラクティスなどの学習をしているとのことだった。最初の1年間で教科書4冊をこなすというスピード、そしてそれについていく学生たちに驚いた。

4年生のレベルでは、新聞を読める程度の漢字はクリアしているとのことだった。特に3年生での日本留学の成果もあって、4年生ではかなりのレベルに達することができるという。また、1、2年生の時も、3年生になると誰もが必ず半年から一年留学するのがわかっているので、日本語学習を進める強い動機づけとなっているようである。

後で聞いたところでは、この学科では「優秀な」学生を選べる状況にあり、学生の到達度の高さはそれによるところも大きいとのことだった。ただ、近年、イギリスにおける日本文化・日本語学習熱は冷めてきており、学生たちの関心は中国文化・中国語学習の方に移ってきてているようである。受験生の減少は、優秀な学生を選ぶ可能性を小さくすることになるので、どこまで現在の教授方針を維持できるか心配も少しあることだった。

#### ⑤ 学生との交流

長谷川先生のお話を聞いた後、日本研究学科の学生たちと交流する時間を設けてもらった。1年生から4年生まで、7人の学生が私たちのために集まってくれた。「コーヒーやビスケットを手にとって、リラックスして！」というクランプ教授の心使いもあって、笑い声の響く交流会となった。それぞれ2、3人ずつのペアになり、話をする。みんな日本や日本語にとても高い



「もうすぐ日本に留学するんだけど、剣道の強い大学はどこ？」  
「わからないから、あとでE-mailで知らせるね」

関心をもっており、積極的に日本語で話しかけてくれた。日本語のレベルもとても高い。学習の成果のほどが察せられる。

なぜ日本語を専攻しているのかという質問には、日本が好きだから、日本に行きたいから、と答えた人が多かった。「好きこそ物の上手なれ」と言う諺もあるように、何となくでも「好き」ということも、日本語を勉強する強い動機であると感じた。日本語の勉強は量も多く、学生にとっては大変だそうである。主専攻で勉強しているだけあって勉強内容は難しいが、学生が口をそろえて言うには、「それでも授業は楽しい」とのことであった。学生の様子から、長谷川先生が授業に工夫を凝らしていることが分かる。先に述べたように、学生の日本語力は初級から上級レベルまで様々であったが、初級の人でも何とか日本語と英語を混ぜながら話すことが出来た。会話力は高いという印象を受けた。長谷川先生は「授業中普通のスピードで話す」とのことでの、学生たちは初めは「早すぎる」と感じるようだが、慣れてくると、それが当然だと思うようになるのだそうだ。初級者に対してネイティブのノーマルなスピードで授業をするというのは、教師にとっても大変な勇気と忍耐強さが必要であろうが、主専攻の学生たちに対しては効果は大のようである。

学生の中には、「漢字が大好き」と言う人もいた。非漢字圏学習者にとって、漢字は文字というより記号として認知されるので、一般に漢字はあまり好まれないと思っていた。それだけに、その言葉には驚いた。書き順やつくりなども勉強し、正しく書けるよう練習しているのだという。イギリスでは授業前に出される予



交流会を終えて  
(長谷川先生：後列左、クランプ先生：後列中ほど)

習の量が多く、学生の自主的な学習態度が求められるというが、そういった学習のパターンが確立しているために、自主的に多くの時間が日本語学習にあてられているようだった。

## ⑥ おわりに

スターリン大学の日本研究学科を訪問し強く感じたことは、日本の私たちが受けた英語教育との違いであった。まず留学制度などの環境面でも、スターリン大学ほど整っている所は少ない。語学力を高めるためにも、動機づけにつなげるためにも、もっと日本でも環境を整えていくべきだと考えた。また授業内容も、「楽しさ」を感じるよう工夫されている。単純作業になりがちなパターン・プラクティスでも、なるべく会話形式にしたり、不自然にゆっくり話すではなく、普通のスピードで話したりするなど、私たちが受けた英語教育とは異なる面が多く見られた。日本の英語教育も、勉強する側の努力も必要だが、教育する側も一層の努力をすべきだと考える。イギリスの大学で、日本とは異なる外国語教育の姿勢、つまり厳しさと楽しさのバランスというものを感じて、私たちはスターリン大学を後にした。

「スターリン大学生との交流は楽しかった!」、「今回のフィールドワークの訪問先の中で、一番楽しかった!!」。これが私たちの全員一致の意見である。それはなぜなのだろう。それは何よりもスターリン大学生が示した「日本が好き」というストレートな気持ちであり、イギリス人の素直な表現が私たちの心にすっと入ってきたからのような気がする。テキストによるとイギリス人にも本音と建前があるようだが、アジアのものと比べると対話の中で用いられることは少ないようである。また、イングランドに比べ、スコットランドという土地柄もあるように思う。日本企業が進出している北部イングランドやウェールズ、北アイルランドなどでも日本語教育が盛んであり、親目的な人々が多いと聞いた。そんな所にも訪れてみたいと思われる、スコットランドへの旅となつた。

### 3-4. 2つの日本研究学科を訪問してみて

矢野 優子

#### ① はじめに

イギリスの章に香港のことを書くのもおかしいのだが、スターリン大学日本研究所日本研究学科を訪れてみて、何となく比較の視点がでてきたような気がする。中文大学を訪問したのはフィールドワークの最初の時点であったから、まだどんな風に見ていいか分からぬ状態であった。スターリン大学ではフィールドワークにも慣れてきたし、交流の経験も積んだので、より自然に学生との交流ができたような気がする。

ここでは、まず香港の中文大学日本研究学科のことを振り返り、スターリンでの経験も含めながら、私の考える日本語教育について触れてみたいと思う。

#### ② 香港中文大学日本研究学科の概要

香港中文大学日本研究学科は、1967年の創設以来、約30年の歴史を持つ。四半世紀にわたって改善がなされてきただけあり、コースの内容はかなりしっかりしていると感じた。履修者の数は500名に達したこともあり、1クラスを22名に制限していたそうである。それでも増加する日本語履修希望者に対応するため、夏休みに集中講義を開講したこともあるそうである。1991年に現在の「日本研究学科」となり、主専攻も設けられた。その課程は主に「日本語」と「日本研究」に分かれ、第1、2学年は、日本語学習が中心となる。日本研究学科の特徴の一つに、2年次の一年間の日本留学制度が挙げられる。高度な読解力や会話力を身につけ、日本経済、日本文学など各自の専門研究に当たることが、この留学制度の目的である。

日本留学や企業研修などが学部の中程の入っているものを、サンドイッチ・コースという。中文大学では1年間の日本留学が、またスターリン大学日本研究学科では、6ヶ月ないしは1年の日本留学が義務づけられていた。領域は異なるが、サリー大学のグローバル・スタディーズ・コースでは、海外と国内の国際協力分野での実務期間が入れられていた。日本でも短期交換留学制度や企業研修などが導入されてきているが、経験から学ぶこれらの期間は学生の成長を大きくするので

はないかと考える。

#### ③ 日本語教師、児島先生

香港中文大学日本研究学科で約11年間勤務してされたのが、児島慶治先生である。現在は主専攻クラスと選択クラスの日本語、高級日本語読解、日本語読解を担当しておられる。私たちはフィールドワークに行く前にE-mailでインタビューをさせて頂き、訪問の準備をした。質問項目は、児島先生ご自身について、日本研究学科について、日本語学習について、という3つからなっていた。それを基に、私たちはさらに掘り下げる質問を考えることが出来たのである。

児島先生に実際にお会いしてみると、親切で几帳面で、普段から熱心に指導しておられる姿が想像できた。教師のパーソナリティーなど、教育にはあまり関係ないように思われるかもしれない。しかし、人を魅きつける性格や、学生に「私たちの力をつけるため努力をしてくれている」と感じさせる熱心さを持つことは、教師にとって重要ではないだろうか。常に授業に創意工夫を重ね、イキイキと教える教師像は、スターリン大学の長谷川先生にも共通していた。ハツラツとしていて、とても魅力的だったお二人の先生。学生たちが「この先生、好き」と感じることは、単なる人気や不人気というレベルではなく、授業中に学生をリラックスさせ、学習動機を高めることにつながると思う。

#### ④ 日本研究学科訪問を振り返って

中文大学の主専攻コースの学生は、1年次の成績に問題がなければ、希望者は全員日本に留学できるそうである。留学前の日本語のレベルは、日本語能力試験の3級程度。3級というと、語彙数1,500語程度を修得し、日常会話に役立つ会話が出来、簡単な文章が読み書き出来るレベルである。一見、あまり高いレベルではないように見えるが、7か月でここまで到達するのは大変だろうと思う。それが最終的に留学を終えた3年次には80%前後の学生が1級に合格すると知り、驚いた。1級は、語彙数10,000語程度、社会生活をする

上で必要であるとともに、大学での学習、研究の基礎となるような総合的日本語能力を修得したレベルである。一年間留学すれば誰でもここまで到達するというものでもなく、彼等の努力に頭が下がる思いだった。

ただ、学生との交流では、中文大学生よりもスターリン大学生の方が日本語ができるという印象を持った。もしかすると、これは私たち自身の、アジアより西欧の人々への甘い評価や、あるいは先入観などによるところも大きいのかもしれない。また、中文大学では英語で交流すると決めていたから、中文大学生の方が日本語で会話を進める動機づけを初めから失っていたからかもしれない。その他、漢字文化圏の中文大学生の方はどうちらかというと読む方が強く、日本語もきちんと話せないことに恥ずかしさを感じているようであった。ちょうど、私たちが頭の中で英語を組み立ててから話そうとするように。それに比べて、非漢字文化圏のスターリン大学生たちは話すことに興味をもつていて、すこしごらいブローケンの日本語でも、英語を取り混ぜながら積極的に話そうとする態度が見られた。そういう違いが、私たちの印象を左右したのかもしれない。

いずれにせよ、スターリン大学でも中文大学でも、学生たちの日本語到達度はかなり高いレベルであることが分かり、日本語教師である長谷川先生や児島先生の責任の重さというものも感じられた。それぞれのコースにはその他の多くのスタッフがいるが、ネイティブであるゆえに自動的に課せられる責任感は大きいであろう。長谷川先生の場合は英語で、児島先生の場合は英語と広東語で同僚スタッフとのやりとりを行い、大学公務を処理する。児島先生の話では、学部教授会や大学全体の会議で、論理性をもった説明や討論を要求されるときは今でも大変ということだった。長谷川先生の場合は夫がイギリス人、児島先生の場合は妻が香港人だから、助けてもらえることもあるかもしれない。児島先生は、広東語・英語・日本語を取り混ぜての娘さんとの会話が大変だし、教育方針が夫婦で異なるのがまた大変と苦労話も聞かせて下さった。異文化の地に生活の根を張り、日本語教師として生きて行かれるお二人にお会いして、同じ日本語教師を目指す私の行き（生き）場所というものを想像してみた。

## ⑤ コンピューター・ソフトの開発

香港中文大学が独自に作成したコンピューターによる日本語学習ソフトを見せていただいた。日本研究学科ではオリジナルのテキストを使っているが、それぞれの課の復習が出来るプログラムを用意して自己学習を促していた。音を聞き取り、文字を選んで音と文字とを一致させたり、アクセントを確認したり、短い文章を拡大していったり、漢字の集合体から熟語を作ったりと、それらは全てゲーム形式になっており、正解しても誤っても楽しい絵や音が出てくる。コンピューターの部屋を離れるのが惜しいくらい、夢中になってしまった。

このようなCAI (Computer Assisted Instruction) 教材を使う所は増加しているそうである。コンピューターで自習し、誤用などを訂正することで、教師の役割の一部分をコンピューターが果たすようになっている。しかも文法などだけではなく、会話や発音も提示されているので、自習にはもってこいだと思う。日本研究学科では教科書やCAI教材などがオリジナルであり、作成者は研究を重ね、いかに学生の能力を伸ばすか工夫された環境作りがなされていると改めて感じた。ちなみに、このソフトの開発には1名の専門の研究者が従事しており、数名の日本語教員がアドバイスを加えたり、試作品に改良を加えたりしながら、完成をめざしているという。テクノロジーの専門家と、日本語教育の専門家とのチームワークである。また、自習のできるコンピューター室にはテクニッシャンが常勤していて、学生たちがソフトを使って自習を進めていく際の質問に答えるシステムが整っている。授業時間では足りない部分を、自習環境を整備することで補う。中文大学のCAI教材は、漢字圏の日本語学習者用にデザインされたものであり、日本の大学で学ぶ同様の留学生にも応用できるのではと思った。

## ⑥ おわりに

二つの日本研究学科を訪問し、新鮮な発見の連続だった。二つの大学では、ともに学生の能力を伸ばすための環境に大変な工夫がなされていた。1クラスの人数制限を設け、留学制度を整えたり、CAI教材を作成したりと、私の知らなかった部分を見ることが出来

た。それらは決して短期間に作り上げられたものではなく、検討に検討を重ねて改良されたシステムであった。

遠く離れた二つの大学だが、共に「日本語を勉強することは楽しい」と学生たちが言い、見学した私たちでも楽しそうだと羨ましく感じた。私自身がしてきた外国語学習（英語）では、机に向かって教科書や辞書と格闘するということが多かったので、楽しいと感じることがあまりなかった。魅力ある教師がいて、ある時は教科書を使い、またある時はビデオやCAI教材を使う。言語だけでなく文化を学ぶ。自主的に自習をする。友人を作る。留学をする。そういった変化に富んだ学習形態が、彼等に高い日本語能力をつけていったのだと思う。まず「楽しい」と感じることが、吸収する力を高めていくのだと強く感じた。

これらの事柄は何も日本語学習に限ったものではなく、外国語教育全般に言えることではないだろうか。大学生になって初めて接する日本語を自分のものとして獲得し、使いこなし、就職していく大学生たちに香港とイギリスで出会ってみて、私自身の未来の生徒に会えるように、素敵な日本語教師になりたいと強く思った。

フィールドワークから帰った私たちの元に、児島先生から一冊の著書が届いた。「香港・日本漢字字体対照表—香港での漢字字体指導によせてー」（向日葵出版社、1999年）という先生ご自身の著書である。

これを読むと、一口に漢字圏の学習者といってもさまざまもあり、特に香港社会のかかえる問題点が、言語という面からだけでなく、歴史や社会という面から見えてくる。

この場を借りて、御礼申し上げたい。

## 4. 異文化ミニ体験記

### 4-1. 香港にて

#### ● 香港のSPEED

香港に滞在している間、私たちが利用した交通機関は主に地下鉄、バス、トラム、タクシー、そして香港島と九龍半島を往復するフェリーなどであった。どの乗り物にも乗客が多く、先生や友だちとはぐれないよう気をつけた。いくつも乗り物を乗り継いでいくうちに、私はある一つのことを発見した。それは、香港の乗り物のスピードが日本に比べて「速い」ということだ。特にタクシーに乗った時に強烈に感じた。香港の道路は日本と同じ左側通行であり、また日本のように様々な車が道路にあふれている。そのため、香港の交通に対する第一印象は、日本と似ていて、想像以上に交通機関が充実しているという驚きであった。しかしタクシーに乗った次の瞬間、あまりの速さに一瞬冷や汗が流れたのを覚えている。運転手さんはちゃんと左右を確認しているのだろうか。ブレーキをかけるとともにカーブを曲がったり、交通量の多い隣の車線に移ったりする。後部座席の私はどうすることもできず、無言のまま、ただ必死に手と足で自分の体の重心をとりながらふんばっていた。

香港のスピードで驚いたのは乗り物だけではない。駅や建物の中にあるエスカレーターの速さにも驚かされた。とにかく速くて、最初は幼い子どものようにリズムや間をとつながら乗った。さらに驚いたことには人々の歩くスピードがとても速かったことだ。日本でも東京のような都会ではよく見られる光景だろうが、山口生まれ・山口育ちの私にとっては、初めて訪れた国で自分よりもはるかに速く歩く人々の集団が何となく怖かった。

\*

スピードに関してもう一つ取り上げることがある。それは「仕事のスピード」だ。これは香港駐在員に伺った話だが、香港の人々はとにかく仕事の処理が速いらしい。例えばある一つの仕事が与えられたとして、日本人なら1週間くらいかけてするところを、香港の人はわずか2、3日で終わらせてしまうというのだ。な

んともびっくりさせられる話だ。

このようにあらゆる面で、日本に比べて香港は「スピード」が速いことが分かった。私たちは日本という一つの國のなかで生きているため、自分とは異なる文化を持った人々と出会った時、ついで日本を基準に比較したり、評価したりしてしまう。だから自然に身についている「日本のスピード」が基準となって、香港のスピードが速いと感じたのだと思う。香港の人々にとっては当たり前のことと、日本人の私の当たり前のことは、同じでない。

それにしても、香港では交通事故がとても多いそうだ。タクシーの運転手さん、もっとスピードを落として、安全運転をするべきですよ。安全第一！

(K.Y.)

#### ● 見知らぬ土地で取り残されたら

香港二日目。山口銀行香港支店訪問後、飲茶をとつてから夕方の社会人との会食を待つ間、ショッピングにでも出かけようということになった。目的地はショッピング街の中心にあるSOGOとした。目的地まではトラムに乗って移動することになったのであるが、どこまで乗っても2ドルという安さのため、とても混んでいる。9人で移動していたが、最初にやってきたトラムに全員が乗ることができず、結局私を含め3人が別のトラムに乗るはめになった。

私たち学生が3人だけ取り残されるというのは、初めてのこと。目的地のSOGOへ行くにあたり、どの辺りで降りたら良いのかさえも把握できないまま、とりあえず私たちは次にやってきたトラムに何とか乗ることができた。私たちがまずやらなくてはならないこと、それは目的地の位置確認。しかし、広東語と英語で記された地図はよくわからず、結局現地の人に尋ねることにした。

“Excuse me...” 私たちにとって、香港でのコミュニケーションの手段は英語しかない。たどたどしい英語で話しかけたにもかかわらず、相手の女性は丁

寧に応対してくれた。しかし、目的地はとても遠く、まだまだずっと先の所にあるようなので、まずは15分くらい乗ってみて、その後でまた別の人聞いたほうがわかりやすいと言われた。15分後、また別の人聞こうとすると、一連のやり取りを見ていた男性が「あと7つ停留所をカウントすれば目的地が見える」ということを教えてくれた。結局、私たちは無事に目的地へたどり着くことができたのだが、この時はさすがにもっと英語を話せるようになって来るべきだったと後悔した。見知らぬ土地で頼れるのは自分自身でしかないということと、そしてそのために言葉が大きな役割を果たすのだということを改めて実感した。

(M.F.)

### ● ベニュンシュラ・ホテル

ベニュンシュラ・ホテル（半島酒店）は、九龍のプロムナード沿いにある5つ星ホテルである。1928年にオープンしたコロニアル・スタイルの豪華ホテルは、入口からロビー、アーケードやバルコニーなど歴史の風格を感じさせる。第2次世界大戦中の日本占領時代は、このホテルが軍の司令部として使われていた。私たちは別の日に、「ベニュンシュラ・ホテルのロビーで待ち合わせ」というのを一度やってみたのであるが、ホテルのドアに恐る恐る近づくと、制服を身につけたドアマンが丁寧に迎え入れてくれた。この日は香港での最後の夜となっていた。渕上さん、藤田恵美さん、柳谷さんと私で、山口県香港駐在員の伊田さんと共に、“ズバリ香港での一夜を素敵に過ごす”ためにベニュンシュラ・ホテルに向かった。最上階へのエレベーターに乗ると、エレベーターは静かに、そしてものすごいスピードで私たちをラウンジへと連れていってくれた。

一步足を踏み入れると、そこは別世界だった。まるで、映画のシーンを見ているかのようだった。私たちは奥の方の席へ案内され、カウンター沿いの脚の高い椅子に腰をかけたが、何だかとても場違いのような気がして、はじめのうちは居心地が悪かった。辺りを見回すと、華やかなドレスを身にまとった女性、タキシードに身をかためた男性が夜景を眺めながら、それぞれの夜を楽しんでいる。そんな中、私たちはジーン

ズにTシャツ一枚といった格好で来ていたのだから、多少の居心地悪さを感じても仕方がない。

\*

しかし、飲み物を注文し、夜景を見下ろしながら静かに話をしていると、とても気分がよくなってくる。私たちは、香港最後の夜を、香港最高級のホテルの、しかも最上階のラウンジで過ごすことができたということに満足していた。

さて、つけ足しのようになるが、このホテルで驚いたことが一つある。それは、トイレだ。トイレに行こうとしたら、伊田さんに「もし、トイレから出てきて女性がいたら、チップを渡すように。」と言われて、何のことだかわからず行ってみた。トイレから出ると、女性が蛇口をひねって私たちを待っていた。手を洗うと、今度はタオルを差し出してくれる。私は、彼女にお礼を言って2\$ほど渡した。こういうしぐさが優雅にできると、映画のワン・シーンのようになるのだろう。

知らない世界って、たくさんあるのだと実感した夜だった。コロニアル時代には、イギリス人の上流階級の人々やビジネスマンで賑わったであろうベニュンシュラ・ホテル。かつて、日本軍人が行き交ったベニュンシュラ・ホテル。香港や中国大陸のお金持ちが利用するようになったベニュンシラ・ホテル。今は、広くアジアのお金持ちが闊歩する。日本からは有名女優や俳優、歌手などがここに泊まるのだそうだ。そんな歴史を眺めてきた建物に、私たちは乾杯のグラスを傾けた。

(M.F.)

### ● 100万\$の夜景

香港といえば「100万\$の夜景」！ 私はフィールドワークに行く前から、随分楽しみにしていた。出国の飛行機の中で書いた私の日記にも、そのことがしつこく書いてある。

それほど楽しみにしていた香港の夜。最初に夜景を見ることができたのは、九龍半島チムサアチョイのウォーターフロント・プロムナードのこと。ここからは、ビクトリア・ハーバーを隔てた香港島にある香港コンベンション&エクシビションセンターのエクステンション（別館）などが見渡せた。これは香港返還の

式典が行われた場所である。ウォーターフロント・プロムナードはずっと長く続いている、見渡す限り対岸のビルのイルミネーションが一面に広がっている。ただ、私が思い抱いていた「100万\$の夜景」のイメージとは少し違っていた。空気がとても汚れており、ボヤーっとスモッグがかかっていた。香港のどこに移動しても、それは同じであった。期待が大きかっただけに、その夜景にとても大きなショックを受けてしまった。香港の街は交通量がとても多く、朝から晩まで交通が途絶えない。それらの出す排気ガスによって、空気が汚れてしまっているとのことだった。

そのほかにも、1998年5月1日に就航100周年を迎えたスターフェリーからの眺めやオープントップトラムからの眺めなど、香港の夜景をたくさん楽しむことができた。夜になるとスモッグも幾分かは気にならなくなり、香港の街はネオンがきらきらと輝くきれいな街に見えた。ただ気になったのは、日本企業の大きな広告塔がネオンに混じっていること。香港の夜景を陣取るような形で、日本企業名が幅をきかせている。

\*

私がそんな香港の夜景のなかで一番感動したのは、ピクトリアピークからの景色だった。山頂のピークタワーに行くために、エンジ色のピークトラム（ケーブルカー）に乗って、海拔373メートルもの傾斜をぐんぐん上っていく。途中で平行感覚が狂う。ビルが斜めに建っているような錯覚を受けるのだ。頂上に着くと、もうそこにはロマンチックな別世界。香港島、九龍半島、新界方面など全てを見渡すことができた。遠くのほうは少しへモッグがかっていたけれど、近くのほうはイルミネーションも明るくきれいに光っている。やっと「100万\$の夜景」を見ることができたと満足した。

帰りの飛行機の中から見た福岡の街。色とりどりのイルミネーションが、ずっと奥のほうまでたくさん続いている。これを見た時、「日本もなかなかきれい」と感動するくらいだった。乗客のなかから「きれい！」の声があがっていた。日本にも、探せば美しい景色はまだまだたくさんあると気づいた。香港、広くいうと外国に対して、いかに私が過剰に期待していたかに気づかされた。香港の夜景を見ることで、日本の夜景の

美しさを知った。

(T.F.)

### ● ギャンブラー必見!! 香港の競馬体験

香港での一日目の夜。私たち一行はハッピーバレー競馬場にやってきた。日本を出発する前に、英国や香港における文化場や社交場としての競馬場の意味についてテキストで読んでいたので、どんな所か見ておきたかった。中国大陸ではあらゆるギャンブルが禁止されており、香港が中国に返還されても競馬場が健在するとは、まさに「一国両制度」の一つの現れと言えよう。香港の人たちが、返還されても生活に違和感を感じないと言っているのも納得！

香港には2つ競馬場がある。一つは、「沙田（シャティン）馬場」といって九龍半島の沙田に、もう一つは「ハッピーバレー馬場」といって香港島側にある。私たちが行ったのは、香港島側である。ライトアップされたターフの芝の緑が夜間照明に映え、なかなかの雰囲気！ 本物の馬が実際に目の前で走るのは、今回が初めてである。

\*

馬券の買の方は日本と同じマークシート方式。ただし、香港の場合種類が多いため、馬券は紫、緑、オレンジの3種類に色分けされ、それぞれのシートにはいろいろな賭け方がある。私たちは試しにオレンジ色の券を購入してみた。それは、ウィン（Win 単勝：一着を当てる）、プレース（Place 位置：複勝、買った馬が3着までに入れば当たり）、クイニラ（Quinella：連贏）用であった。簡単な説明を聞いて、マークシートに自分のラッキーナンバーを選んで記入してみた（これが後のアンラッキーな結果を招いたけど…）。他のみんなは、きちんとテレビ画面の各馬の人気指数を参考にしながらそれぞれのシートにマークしていた。

シートに記入してから5分も経たない内にレースが始まった。レース前にコースをゆっくり一周する馬たちの姿、そしてその上に乗るジョッキーたちの華やかなユニフォームが大型スクリーンに映し出される。いつしか私たちも興奮する現地の競馬ファンに紛れて大声を出し、それぞれが買った馬を応援し始めた。結果はご察知の通り、私は惨敗。メンバーの中で一人だけが1.7の倍率の儲けを得た。1.7倍といつても、彼女は

最低限の10ドルしか賭けていなかったため、儲けはわずか7ドル（約110円）だったのだが。

\*

香港の競馬場は大変な人手で、よくテレビで見かけるシーンが目の前にあった。バルコニーのようになつた多くの席に豆粒くらいの人影が並んでいるのが見える。この競馬場の広さは相当なものであり、そんなものが街の中心地にあることに驚く。競馬場の柵の向こうは、高層ビル群である。これを見ると、香港を統治していたイギリスが競馬をどれほど大切にしていたかが察せられる。

イギリスの競馬場は、もっと社交的な面が強い。夏の日差しを浴びながら、のんびりとシャンパンやお茶など飲み、馬に触れたり、自然に触れたり、人々とワイワイやったりしながら一日を過ごすのだそうだ。私たちがフィールドワークを行ったこの時期には、イギリスで競馬が行われないのが残念。香港とイギリスの競馬を比べることはできなかった。 (T.W.)

### ● 試 着

車や人通りで慌ただしい香港の夜、少し汗ばむ中ショッピングに出かけた。服はSサイズのものがほとんどで、日本の服より安いものが多くた。ある店で、私たちは気に入った洋服を見つけた。「試着してもいいか」と店員に聞いたら、「試着してもいいけど、トイレであること」、また「試着の前に、その服の代金を払ってからならいい」とのことだった。「もし気に入らなければ店にあるものを何回試着し直してもいいが、その代わり何か一着は買うように」とのことだった。私たちが「それならもう買わない」と言って出ようとしたら、店員が慌てて引き止めて、二人で二着買ったら50ドル安くすると言ってきた。その話を聞いて私たちは試着をし、二人で二着買うこととした。

何か得をしたつもりでいたのだが、50ドル安くしてもらうのを忘れていたことに、香港を離れてから気づいた。香港では二重価格が店頭で使われており、日本人がくると高くなるという通説であったが、私たちは騙されたのか、単なる店員の手違いか。「やられた！」と思わず口走った私たち。一般に接客もドライで、日本のように「お客様はカミサマ」というバカ丁寧な

扱いはない。

(S.N.)

### ● 九龍城公園

香港を離れる朝、九龍城公園に行ってみた。少し前までは香港マフィアの本拠地であり、犯罪ありドラッグありと恐れられた所である。観光客はここには絶対近寄らないようにと注意を受け、また一度足を踏み入れると絶対に生きて戻って来れないなどと恐れられていた。そんな「九龍城」とはどんな所だったのか。公園には当時の写真が展示されており、それを見ると何層にも重なるように不法に建てられた単なるアパートのかたまりであった。あまりにもイメージと違っていたのでびっくり。

九龍城がマフィアの犯罪の巣窟として有名になる前は、もっと歴史的な場所であった。アヘン戦争後にイギリスの要塞となり、その後はWalled Cityとして城壁の中に人々が住み着いたところである。この近くには、今はその灯を消した啓徳空港があり、この公園の真上すれすれに飛行機が飛んでいた。第2次世界大戦中に日本軍が香港に進出した際、約3年8ヶ月に及ぶ占領時に、啓徳空港の軍事用としての空港拡張計画が持ち上がった。このWalled Cityは、日本軍によって壊される計画にあったのだそうだ。日本軍の計画が実行されないままに終戦。その後、Walled Cityは英國統治下の香港で、新しい居住区として開発された。しかし、いつの頃からか一般市民の居住地は悪名高い犯罪巣窟としての九龍城に変わっていき、ついに1994年に解体され公園として生まれ変わったという。

さて、18世紀のアヘン戦争よりも前にことになるが、公園内の掲示によると、明朝の頃からこのあたりの海沿いは「倭寇」の被害を受け、それを防ぐための要塞が築かれていたとあった。“prevent the invasion of the ‘WAKO’ Japanese pirates”という文章を見て、第2次世界大戦の日本軍占領時代が香港に与えたことに加えての二重の被害者としての歴史が、この地には残っているのだということを身近に感じた。その後、本屋で立ち読みした香港の歴史書には、「日本軍占領下において、軍による食糧その他の物資の強制供出が行われ、数十万人が飢餓で死亡した」とあった。何だかやりきれない気持ちで、香港をあとにすること

になった。

(M.I.)

### ● 環境への配慮

香港を訪れるのは三度目になる。前回行った時に購入した「百万ドルの夜景」のポスターを研究室のドアに貼って置いたので、それを目当てに香港に来た学生のみなさんには申し訳ない感じがする。ポスターにあったような見事な夜景は、スモッグのせいで見ることは叶わなかった。観光旅行は「疑似体験」とテキストにあったが、私たちのなかにはテレビや雑誌、ガイドブックなどが提供する香港のイメージがすでに出来上がっていて、それと違っていると「こんなはずじゃない」、「これは本物の香港ではない」といった感じがしてしまうのだ。

山口県香港駐在員の話によると、スモッグのかかる空気の汚れた香港こそが「本物の香港」とのこと。一年を通して湿度も高くて、暑くて、ここで暮らすのは大変なのだろう。以前二度ばかり香港を訪れた時は、そんな感じはしなかった。観光客の感覚は、そこに住む人の感覚と違うのだろうか。今回特にビルのなかでの冷房を「寒い」と感じた。学生も「寒い、寒い」と言って、上着やコートを着ている。外は汗が出るほど暑く、室内はコートがいるほど寒い。「こちらの人は、冷房を入れると空気がきれいになると思っているみたいですよ」との説明に、そんなものかなあ。

\*

香港は新鮮な魚介類の料理が有名だけれども、この近海で取れた魚は汚染がひどくてとても食べれた物ではないという。生活排水、その他なんでもかんでも直接海に垂れ流しているらしいので、そういう事実を知ると魚を食べるのが怖くなる。「知っている人は食べない」らしい。知らないのは観光客だけなのか？

実際、九龍半島と香港島の間の海はとても汚れている。大きな海に続いているので、湾のようにここにゴミが溜まってしまうということはないが、それでもこの小さなテリトリーで暮らす670万人の排水を取り込んでいたのでは、海もたまらないだろう。その日その日の変化や、目の前の生活や、お金の流れなどに目が向いているといわれる香港では、まだ環境問題への人々の意識は低いようである。国際貿易センター、国

際物流センター、国際金融センターなどといわれ、モノが流れていく香港で、そこに定住する人々に目を向けた政策がなされる日はくるのだろうか。そんな香港で、最近急成長しているものの一つに労働福祉をアドバイスする企業があるという。労働者の福祉と健康をパッケージして、社員4名から200名に伸びた会社もあるそうだ。香港の経済悪化で社会全体がスローダウンした結果、そこに働くヒトに目が向いてきたのではないだろうか。

ヒトといえば、香港返還によってインド系住民の香港在留資格に大きな不安が残された。イギリス統治時代に、インドやイギリス本国、アフリカなどから移民してきた生活の基盤をやっと築いたというインド系住民も、香港が中国に返還されることによって在留が難しくなった。その人々は、またどこかに流れて行かざるを得ないだろうと言われている。ショッピング街でチラシ配りをしていたのは、たいていそんなインド系住民らしかった。

\*

香港の新空港から、島と島の間をぬつていくつかかる美しい橋をわたって市内に入り、また市内から出た。開発現場のあちこちで、日本の会社名を目についた。在香港日本人約2万7千人。約700社の日本企業が活動を続けている香港。中国大陸で環境問題が取り上げられるようになり、日本からの国際協力が進められている今日、返還後の香港でも環境改善のための協力がなされるようになっていくのだろうか。自由貿易政策をとるイギリス統治下の香港で、国際協力や援助協力といったものが語られることはほとんどなかつた。これからの中香港では、そこに住む人々の生活環境の改善、環境意識の向上のために、人々の協力が必要だろう。

(M.I.)

## 4-2. イギリスにて

### ● クロッカスとダフデルに迎えられて

まだ体の芯までこたえるような寒さのロンドンに降り立った。寒い山口を出て、飛行機を降りると蒸し暑い香港、次にヒースロー空港に降り立つと、3度とか5度とかいう寒さである。今年は特に寒さが厳しかったそうだ。それでも、私たちの滞在した期間は割合天気が良いほうで、帰国した私たちの元に「雪のロンドンから」とか「雪のリーズから」といった便りが届いた。

ロンドンの公園を歩くと、クロッカスの群生をあちこちで見かけた。緑の芝生に色とりどりの花びらを振りまいたようでなんとも美しい。またイギリスの春の象徴ダフデル、黄水仙が花を開き始めており、黄色い絨毯がきれいだった。イギリスを訪れるのは7、8月が最も良いと聞いたが、これらの公園が薔薇や色とりどりの花々で覆われ、そのなかを人々がゆったりと歩いたり、ベンチに腰掛けたりしている光景は、想像するだけで楽しい。

\*

今回のフィールドワークでは、長距離バスを使った。ロンドンから一步外へ出ると、どこまでも続く緑と、行儀良く並んだ家並みが交互に見られ、自然のままの川土手、人のいない田畠、点在する羊など、出発前にテキストで読んだ「イギリス」が目の前に広がった。国内線にも乗ってみた。ロンドンからスコットランドまで最も値段の高い路線は、ヒースロー空港からエジンバラ。次に高い路線は、ヒースローやガトウイック空港からグラスゴー・シティー空港。そして私たちが使わざるを得なかった最も安い路線は、ロンドン郊外にあるスタンステッドやリュートン空港から、グラスゴーの郊外にあるプレストウィック・インターナショナル空港。私たちが使ったのは、ライアン・エアというアイルランド系の航空会社で、一機の飛行機で行ったり来たりしているようだった。飛行機はイギリスとアイルランドの間にあるアイリッシュ海上空を通り、スコットランドの先端から北アイルランドに渡るフェリーの出る港、ストランラーの近くの空港に降りる。荒海と、荒涼とした丘。そこから列車に乗ってスコットランド第一の都市グラスゴーまで約1時間。列

車の両側には、自然の起伏を利用したゴルフ場が延々と続く。ところどころで見かけるゴルファーたちのゆったりした動作。私たちは、全く別の世界に来たような感覚に浸った。

\*

今回のフィールドワーク中で最も美しかった場所は? というと、全員一致でスコットランドのスターリングである。映画「ブレイブ・ハート」で有名なイギリスとスコットランドの戦いを含め、1297年と1314年の二つの大きな戦い、その他数えきれないほどの戦いがこの地で繰り広げられた。勇者ウイリアム・ウォリスを記念する高い塔がスターリング大学側の山の上に建てられている。悲劇の女王といわれるメアリーがわずか9ヶ月で即位したのもこの地で、彼女はスターリング城を居城としていた。

ところで、何がそんなに美しかったの? と聞かれるとき、それは街と自然の織りなす光景。落ちついた街の風格、街を流れるフォース川の装い、その向こうに広がる低い丘陵とそれに続く山々。さまざまな緑の色は淡く、弱い太陽光線が筋のように街に降り注ぐのが見え、特に朝早く、丘の上有るユースホステルの窓から眺める景色は溜息が出るほどきれいだった。また、小高い丘の上に立つスターリング城からの眺めも格別。「ここより美しい場所はないのではないか」と言ったら、「いや、ここはイギリスでも最も美しい場所の玄関口であり、ここからもっと北の方、ハイランドやグラニビオン、オーケニーやスカイ島などが本当に美しいのだ」と言われた。そんな美しさは、私たちの想像力の域を超える。

\*

さまざまな意味での「美しさ」のあるイギリスを垣間みただけの今回のフィールドワークであったが、今後イギリスに関するテキストを読む時、以前よりは理解が進むことを期待したい。

(M.I.)

### ● レディー・ジェーン

イギリスへ行く前に、「イギリス・比較文化の旅」で、9日間だけ王位について1554年に処刑されたレデ

イー・ジェーンの章を読んだ。そこには彼女の悲劇的な運命と、ロンドン塔での処刑の図がナショナル・ギャラリーにあること、また同じくロンドン塔に投獄されたジェーンの夫が牢獄の壁に刻んだといわれる彼女の名前のこと�이書いてあり、ぜひこれらを自分の目で見たいと思っていた。その日、私たちはバッキンガム宮殿を訪れた後、近くのカフェで昼食をとり、ロンドン塔に向かった。ロンドン塔の中の、Tower Green の Beauchamp Tower (ビーチャム塔) の内側の壁に彫ってあるたくさんの文字のなかに、ついに私たちは彼女の夫が刻んだ「ジェーン」の文字を見つけた。たくさんの人々が牢獄のなかで刻みつけた文字をたどっていくと、当時様々な罪名をつけられてロンドン塔に投獄された人々の悲痛な叫び声が聞こえてきそうであった。ジェーンの夫も、「ジェーン」、「ジェーン」と叫びながら、この文字を刻みつけたことであろう。このロンドン塔の中でこれらの文字を見ていると、450年という年月などなんでもないもののように、あるいは450年という年月は一体なんなのだろうといった気がしてくる。

\*

レディー・ジェーンは、1537年の9月にヘンリー七世の檜孫として生まれる。彼女はノーサンバランド公の野心のために、その四男のギルフォード・ダッドレーと結婚させられ、16歳で王位を継ぐことになった。しかし、彼女は正当な王位継承者ではないとみなされ、わずか9日間で王位を投げ出さなければならなかつた。その上、反逆罪で捕えられ、夫のダッドレーとともに、Tower Green で斬首されてしまったのである。それが、1554年2月12日のことだった。Tower Green の外には斬首用の太い木が置かれていて、観光客はここに自分の首を置いてみることができる。私たちがタワーから見おろしていると、若いカップルの男性の方が低く跪いて自分の首をここに置き、左右に広く両手を広げた。その瞬間に斧が振り降ろされるのだ！

先にも書いたように、私は「ジェーン」と小さく刻まれた文字を見たとき身震いがした。今からもう450年以上も前に刻まれたものであるけれども、はっきりと残っているという事実に。わずか16歳にして、死を目前にして、彼女は何を思ったのだろうか。

\*

このジェーンが処刑される、生々しくも痛ましい絵があるのは、ナショナルギャラリー（国立美術館）。ナショナルギャラリーには、ゴッホ、モネ、ルノアールやピカソなど、テレビや雑誌で見たことのある画家の作品がたくさん並べられていた。そのなかで、ひときわ重苦しい雰囲気を漂わせていたのは、ドラルーシの「レディー・ジェーンの処刑」の絵であった。重苦しい、静かな、恐ろしい、可憐な、凛とした、死の目前で時間が止まった絵。

この絵は、真っ白なドレスを身につけ、真っ白な目隠しをされたジェーンが、手を伸ばして、処刑台がどこにあるのか探しているところを描いたものである。ジェーンの横には、冷たい視線で彼女を見おろす首切り役人がいる。ジェーンのまだあどけなさの残る表情と、その首切り役人の冷淡な表情を見ると、また私は少し身震いをしてしまった。死を恐れないかのように見える彼女の表情の奥に、いったいどれほどの恐怖が隠されているのだろうか。この瞬間の数分後、いや数秒後には、恐ろしいことが行われるのである。言葉には言い表すことのできない気持ちに、まわりにいた人たちも立ち尽くすしかできなかつたように思える。みんな、長い間その絵を見続けていた。私も、つい1週間前にロンドン塔で見た「ジェーン」の文字を思い出し、しばらくそこに佇んでいた。哀れすぎる彼女の人生である。運命に翻弄されたひとりの女性の人生。私は、レディー・ジェーンのことを、忘れるこことはないと思う。

(T.F.)

### ● リーズの危険な夜

出発したばかりの頃は、有り余るほどの元気に満ちあふれていた私たちにも疲労がたまってきて、段々と口数が減ってきたかなと思われた3月1日の夜、私たちにとって衝撃的な事件が起こった。場所は、リーズのB & B (Bed & Breakfast) の一室。

その事件とは、私たちがシャワーを浴びてゆっくりしていた時に突然起つた。トントントンというドアをノックする音が聞こえてきた。私は友だちが遊びに来てくれたんだー！と思って、いつものように元気に「ハーヤー！」と返事をした。すると、驚くことに男の

人の声がドアの外から聞こえてきたのである。「ハロー！」と。私は本当に驚いてしまった。まさか、全く知らない誰かがやってくるとは予想もしていなかったからだ。

\*

一回目のノックでは丁寧にお断り（？）したが、「今、何時か？」とか、「タバコを持っていないか？」とか言ってしつこくしつこくやって来て、どうにか部屋のドアを開けさせようとしたくらんでいるのが分かった。それがあまりにもしつこかったので、恵美ちゃんが“No, Thank You！”とか、“Good Night！”とか“Bye！”とか言って撃退していたので、なんだかその状態がおかしく思えてきた。幸恵ちゃんも私も、最後の方はゲラゲラ笑いながら、恵美ちゃんと一緒に3人で撃退した。

私は3人同室だったからドアを開けずに済んだけれども、一人だったら、もしかして何気なくドアを開けていたかもしれない。先生に「絶対にドアはすぐに開けてはいけませんよ」と言っていたにもかかわらず。それを考えたら、本当に怖いナーと思う。もしかして殺されたりしていたかもしれないし、お金を奪われていたかもしれない。

\*

その前にも、他の人が怖い目にあったということを聞いていたし、私が夜、飛行機の中で寝ているときに怪しい男性に鞄を狙っていたこともあったし、香港でもいろいろなところで、私たちのあまりの無防備さをたびたび指摘されていた。私たちは随分注意して歩いているつもりなのだが、まるで「盗んで下さい」と言いながら歩いているようなものだと言われた。

外国に来てみて、日本で自分がどれだけ平和慣れをしているかを思い知らされた。私たちは、山口という日本の中でも特別に平和なところに住んでいる。山口だったら鞄を10分くらい外に置いていたとしても、盗まれることはほとんどない。しかし、一歩日本を出て外国へ行くと、そこは私たちの住んでいる山口ではないのである。自分の物は自分できちんと管理しなければならないし、自分の身も自分で守らなければならぬ。そんな簡単なことだけれども、外国に行って、そのことを本当に実感した。

(T.F.)

### ● キングスクロスでの恐怖体験

ロンドンに来て2日目の夜。私と矢野さんと藤田幸さんの3人は、キングスクロスでこの旅始まって最大の恐怖体験をした。今となっては笑い話として語れるが、その時は本当に身の危険を感じたくらい、怖くて不安な思いをしたのを今でもはっきり覚えている。

その夜はイギリスに来て初めて、3人だけで食事をしようということで、多少不安を感じながらも先生や他の友だちと別れて、意気揚々とキングスクロスにあるハンバーガーショップに入ったのだった。別れる前に「ここはロンドンの中でも危険なところだから気をつけるように」と言われていたが、まだ夜も早いこともあって大丈夫かなという感じで別れたのだった。というより、香港やイギリスの食事に飽きた私たちは、ハンバーガーを食べたくてしかたがなかったのかもしれない。

片言な英語ではあったが3人とも無事注文をすませ、席についてハンバーガーをおいしく食べていた。すると3席くらい離れたところに座っていた一人の若い男の人が、しきりにこちらを見ているのに気づいた。はじめは日本人だから珍しいのだろうと思い、気にせず食事を続けていたが、時間がたってもその人の視線はこちらにまっすぐ向いていて、不気味な笑みを浮かべている。さらにポケットからナイフのような金属類を取り出して、カチカチと音を立てていたのだ。次第に私たちも怖くなり、早く食事をすませて一刻も早くこの場から離れようとした。ここへ来る前に先生から言われた、「このキングスクロスという街は夜になんでも人通りが多く、スリがいるから気をつけるように」という忠告を思いだし、私たちはあの男性が私たちのお金をねらっているのではないかと思い込んでしまったのである。

\*

一旦そういう思い込みをすると、頭の中はパニック状態。私たちは小声で、しかし顔は無理に笑顔をつくろいながらも、これからのこと真剣に考え始めた。そこでまずはトイレに行って、カバンの中から貴重品であるパスポートとお金を取りだし、それを着ているズボンの中に無理やり押し込めた。というのも、いくらカバンをしっかり持っていても、後ろからナイフで

肩ヒモを切られ、カバンごと盗まれる危険があると先生から聞いていたからだ。3人は何よりも自分の命が一番大事なので、最悪の場合はお金を全部渡す覚悟さえしていた。それからあの男性がいなくなっていることを願いながらトイレを出たが、やっぱりまだ彼はいた。覚悟を決めて店を出ようとしたその時、彼のほうが先に店を出たのである。結局私たちは何の被害も受けることなく、無事にホテルに帰ることができた。

\*

後になって冷静に考えて見ると、私たちは一種の誤ったイメージや固定観念にとらわれて、ただ単に自分たちが勝手に作った妄想劇を演じていただけなのかもしれないと思った。外国に行くと、日本人は誰でもお金持ちだというイメージからねらわれたり、だまされやすい、とよく言われる。しかし私たち日本人の立場からすると、それは大きな誤解であると同時に、迷惑な話である。国によっておかれている経済状況が異なっているのは事実だが、必死に働いて稼いだ、なげなしのお金で外国へ行く日本人も沢山いるのだ。また、日本人だからといって定価よりも高い値段をふっかけられることも、日本人に対する一種の差別や偏見ともとらえることができる。このように考えると、今回の事件も勝手なイメージや固定観念が原因となって、私たちはあの男性に対して失礼な考え方や行動をしてしまったのではないかと思った。もしかしたら彼は日本人がいることがただ珍しかっただけで、私たちのお金を盗む気など全くなかったのかもしれない。ナイフに見た金属も、何かの鍵やライターだったのかもしれない。

日本では当たり前のことだが、外国へ行くと通用しないことがある。そのため言動には細心の注意が必要となる。スリが多い街中では油断せず、常に注意を払うのは当然のことである。しかし勝手な思い込みで、差別や偏見につながる行為や考えはしてはならないと思った。「日本人はお金持ちでいはっている」と思われていたら嫌な気分がするのと同じように、「ガイジンはドロボウ」と一方的に決めつけてしまったら嫌だろうから。

(K.Y.)

### ● ユースホステルの醍醐味

3月5日の晩、私たちはグラスゴーのユースホステルに宿泊することになった。この旅で2度目のユースホステルである。日はもうとっくに暮れていて、私たちは疲れきっていた。旅も終わりに近づいており、スーツケースや手荷物と、多くの荷物を部屋まで運ぶことになった。しかも、私たちの部屋は3階である。階段の途中で気を失いそうになるような重さだった。そして、ようやく部屋についてみると、すでに一人の男性が就寝していた。私たちは3人だったが、どうやらこの部屋は6人部屋らしい。静かに部屋へ入り、荷物の整理をしていた。すると、さらに2人連れの女性が部屋へ入ってきた。部屋はもう満室である。私は、ユースホステルで他の人と一緒になるという経験をしたことがなかったので、彼女たちとどう接していくのか分からなかった。とりあえず挨拶だけ交わし、荷物の整理を続けた。私たちが、荷物の整理に苦戦していると、何だかもの珍しそうに私たちの荷物を見ている。思いきって話しかけてみた。“どこから来たのですか？”…

この一言をきっかけに、私たちの会話は始まった。彼女たちは高校の先生らしく、この日も仕事でグラスゴーまで来ていたらしい。私たちが、大学のフィールドワークで香港とイギリスを旅行しているのだという話をしたら、彼女たちはとても興味を持ってくれた。彼女たちはヨークから来ていて、私たちが3月2日にヨークを訪れたのだという話をしたら、「ヨークにたったの1日しかいなかつたのか？」と驚いていた。ヨークを1日でまわるのは短すぎるというのである。確かにそうかもしれない。今回、普通ではまわりきれないほどのところを見てきたが、どこも時間が足りなくて、くやしい思いをした。“もうちょっと見たい…”、これが本心である。ほんのさっきまで全く見ず知らずだった彼女たちと世間話をして、旅の良さを実感した。自分の行動や態度によっては、たくさんの人と出会いがそこにはあるのである。シャワーの勢いが無かったり、部屋は3階だったりと大変な思いはしたが、出会うはずの予定ではない人たちと交流が持てて、本当によかったと思う。

(M.F.)

### ● Yellowと言われた日

同じグラスゴーのユースホステルに泊まった時のこと。私たち4人は、高校の先生と一緒にになったという3人とは違う部屋に通された。7人部屋に全員一緒に泊まるよう予約していたはずが、着いてみると3人と4人に別れ、別々の部屋に泊まるようになっていたからである。普通なら「話が違う」とクレームをつけるそうだが、私たちは文句一つ言わず、素直に別々の部屋へと向かった。後から一つの部屋で、ある「事件」が起こるとも知らずに…。この日は、フィールドワーク最後のテスト（？）として、学生だけでユースホステルに宿泊し、自分たちで全てを交渉するようになっていたのである。あとで、先生に「何でクレームをつけなかったのか」と言われたが、どうしようもなかった。

私の泊まった部屋には、もう既に中年女性が2人泊まっていた。少し気むずかしそうな女性と、優しそうに静かに本を読んでいる女性である。私たちはすぐそれぞれお風呂に入ったり、明日の準備を始めたりした。部屋に着いたのは夜10時をまわっており、彼女らはベッドで横になっていた。私たちは次の日も朝6時に出発と早かったので、なるべく音を立てないよう、注意を払いながらスーツケースを整理していた。その時、気むずかしそうな方の女性が突然起きあがり、私たちを指さして、大声で怒り始めた。

\*

「もう夜なのに、何をしているの。うるさくて、眠れない。」と、ものすごいけんまくである。謝って、「明日の朝が早いから」と説明しようとしても、謝るスキがないくらいにまくしたてる。どうやら、昨日の夜も他の人が気になって、よく眠れなかつたらしい。彼女の怒りは、いつまで経ってもおさまらなかった。何も言えない私たちを見かねて、もう一人の女性が彼女をなだめようしてくれた。そのうち二人は口喧嘩を始め、私たちはオロオロするばかりで、黙って二人の言うことを聞くしかなかった。どうして、英語が口からでてこないんだろう…。

気むずかしそうな女性の方は、「音がしたら、眠れない」としきりに言う。もう一人の女性は、「ユースホステルなんだから、多少の音は仕方がないじゃない」と言い返す。その繰り返しで、気むずかしそうな女性の

方は、ますます機嫌が悪くなってしまった。そして彼女は、「昨日も今日も、部屋にyellowが入ってきて、うるさくて眠れない」と言ったのである。私は、愕然としてしまった。私たちを“yellow”と呼ぶなんて…。

\*

しかし私自身、「イギリスの店員には、黒人が多い」と、2、3日前に言ったことを思い出した。差別の意識は全くなかった。自分が“yellow”と言われて初めて、人種で区別するこの呼び方が、どんなに人を傷つけるか知ったのである。世の中には、人を区別する言葉が多く存在する。性別、国籍、民族、そして人種など。それらは本当に全て必要な区別なのだろうか。区別する必要のないものもあるのではないだろうか。少なくとも、私はもう、黒人、白人などという言い方はすまい。そう固く誓った夜であった。

しかし、もう一度よく考えてみると、彼女は「昨夜も今日もyellowが…」と言った。ということは、昨夜、彼女らは別の日本人グループか、あるいはアジア人と一緒だったわけである。日本人は特にお風呂やシャワーの長さ、使う湯の量、持ち物の多さなど、ヨーロッパの旅行者の間では目立つ行動が多いという。イギリス流のシンプルな「旅人」と、私たち日本人「観光客」の違いであろうか。旅人としてでなく、観光客としてユースホステルを使う私たちは、旅の流儀に反していたのかもしれない。今、バックパックの旅が日本の若者に流行しているが、バックパックの旅はヨーロッパの若者たちがずっとやってきた旅の形である。きっと、あの中年の女性は、スーツケースをかかえた大仰な旅支度の私たちはユースホステルなんかに泊まるべきではないと腹を立てたのかもしれない。

はじめに、「音をたててご迷惑でしょうが、ちょっとバスルームを使いますから」などと、ひとこと言えば違っていたかもしれない。英語圏では、“May I...”といった挨拶が潤滑油になる。「窓を開けていいですか」とか「ここに座って構いませんか」など、相手にちょっとした配慮をするエチケットのいることを、英会話でも習っていた。ドアを開けて次の人に待つとか、エスカレーターの右に寄って急ぐ人を先に行かせるとか、エレベーターで見知らぬ人にもちょっと挨拶をするとか、何かを注文する時に必ず“Please”をつ

けるとか、お皿を下げにきたウエイターに「おいしかった、ありがとう」の一言を言うとか...。「相手」と「自分」がいる時には、言葉でちょっととしたことを言い表して関係を築く習慣が、日本社会ではあまり必要ない。彼女は、そんな私たち日本人の態度に腹を立てたのかもしれない。

(Y.Y.)

### ● 日本での逆カルチャーショック

レディーファーストという言葉がある。日本はこれを実践している国とは言いがたいように思うが、フィールドワーク中、特にイギリスでそれを肌で感じることが出来た。私たちは慣れないことによどいながらも、レディーファーストの世界を味わって日本に帰つて来た。私は、レディーファーストが絶対正しくて、男性が先なんてけしからんとは思わない。しかし、お互いに譲り合う心は大切であると思う。フィールドワーク以来、特に強くそう感じるようになった。

レディーファーストだけでなく、他人に配慮する心使い。ロンドンのエスカレーターでは、全員きちんと右側に立つ。左側は急いでいる人が通れるよう、空けておくのである。なんて便利な習慣だろう。日本のエスカレーターでは、二人並んで立つ人が多い。急いでいても、その間をぬって行く勇気は私にはない。着くまでじっと待つしかない。日本に帰つてデパートなどに行き、日本にもそういう習慣が根づかないかな、と思ったものである。

\*

さて、話は戻つて、3月8日、私たちは福岡空港に降り立つ。2週間ぶりの日本である。みんなの疲れた表情の中にも、安心の色がうかがえた。帰国手続きを済ませ、後は税関を通るだけ、という時である。税関は大きな荷物を抱えた、多くの人の長い列でごった返していた。私たちも、なるべく早く進みそうな列を探して並んだ。

あと5、6人で順番が回つて来るという時、私の並ぶ列とその横の列のちょうど真ん中辺りで「どちらが早いかな」とつぶやきながら立っている男性がいた。そして「やっぱりこっちかな」と言いながら、堂々と私の前に並んだのである。一瞬ハッ?と自分の目を疑つた。その思いが表情に出ていたらしく、私のぶ然とし

た顔を見て、その男性は「割りこんだんじゃないよ。最初はここに並んでいた。」などと平気な顔で言ったのだ。まさに、逆カルチャーショックだった。

税関に並んでいる人は、みんな長旅で疲れている。少しでも早く帰りたいのは同じであろう。私も早く帰りたかったけれど、その男性が一言、「ここに入つてもいいですか」と言ってくれれば、笑顔で「どうぞ」と譲つてあげる優しさくらいは持っている。当然の顔をして、割り込む人がいる。しかも、女性の前に。こういうことは、日本では普通に体験することのように思う。譲ったからといって、別に大損をする訳でもない。ただ一言断れば、もっと気持ちよく譲ることが出来るのではないか、と思う。「先にいいですか」、「どうぞ」、「ありがとう」。そんな短いやりとりでいいのだから。

(Y.Y.)

## 5. おわりに

2月24日の日本出国から3月8日の帰国までの13日間で、私たちは香港とイギリスを訪れた。企画から実行まで約1年間。その準備期間よりも、今こうやって振り返ってみる時間をもつことで、フィールドワークの意味が何であったのかが、じんわりとわかってくる感じがする。

毎日ダイアリーをつけるよう準備し、訪問が終わってちょっと一息という時に、あるいは移動中のバスや列車や飛行機の中で、またホテルのベッドに横たわり眠い目をこすりながら、記録をつけた。報告書を書くにあたって、何でもないメモが非常に重要であったり、必要なことが書き漏らされていたら、ダイアリーの大切さがわかる。7人いたので、それぞれのダイアリーを持ち寄って、足りない情報を補足し合った。記録の大切さを、後輩たちへのアドバイスしたい。

写真もまた重要であった。記念・資料・証拠としての写真の役割のうち、帰国してみると、私たちの撮ったものは記念写真ばかりで役に立たないということに愕然とした。これも、私たちから後輩へのアドバイスである。

訪れた先々で多くの方々に出会い、そして助けられたことは、私たちのこれから長い人生にもきっと役に立つであろうと思う。「可愛い子には旅をさせよ」ということわざがあるが、本当に旅は人を成長させるようだ。私たちも今回のフィールドワークを通して、異国の地で様々な出来事を経験したことによって、少し成長できたと思う。私たちの「甘え」が旅では通用しないことを実感できただけでも、収穫かもしれない。

蛇足となるが、香港返還をめぐる変化は、中華人民共和国のパスポートをもつ私自身の入国についてみればよくわかるだろう。香港返還で中国の一部となった香港への観光目的の入国は、7日以内に限りビザ不要となった。もちろん、イギリスへの入国には従来通りビザが必要である。そこで私は、日本の英國領事館で観光ビザを取得する手続きを始めた。そこで問題になったのが、香港通過である。英國側は、英國入国ビザの手続きは、香港入国・通過のビザをとってから出直すようにと言う。私が

### 天 壁 間

「7日以内の滞在はビザ不要になった」と説明すると、「では、ビザは必要ないという証明を中國の領事館からもらってきてなさい」と言う。これを中華人民共和国領事館に手紙と電話で問い合わせると、「そんなものは発行しない。ビザ不要といったら不要なのだから。それは英國側の勝手な言い分であって、中国国籍を持つ者が中國の領土である香港に入国するためのビザが必要か不要かを、なんで英國が口出しする必要があるのか」と怒ったような口調で言い返されて、とりつくシマもない。私は証明をもらってこいというイギリス側と、証明は発行しないという中國側の板ばさみとなった。こうなると国際間の問題であって、私個人の問題ではないといった感じがする。

この状況を英國領事館に届けるため、状況を説明する文書を提出した。その他、在学証明書、スタディツアーパート証明書、旅行日程表、銀行の残高証明書、往復の飛行機のチケットなども提出した。たった1週間そこいら、観光目的で入国するために！

すると、電話によるインタビューを行うという通知があった。アポイントメントの時間に、大学の研究室で待機する。英語でのインタビューに備えて、練習も少しした。実際のインタビューは、英國領事館側の電話口に通訳がつき、日本語で行われた。それから、ビザを押したパスポートが返送してきた。日本での在留許可の更新をしてからでないと英國領事館へのビザの申請ができないので、全部で約2カ月間のハラハラ・ドキドキとなつた。一時は、もうフィールドワークへの参加は無理かなと諦めの境地となった。イギリス入国に当たっては、ビザを持っていてもなお、入国審査官の質問に腹立つ経験をしたのだが、それは蛇足の蛇足のお話。

最後にもう一度、今回のフィールドワークにご協力下さった多くの方々に御礼申し上げ、この報告書をお手元にお届けしたい。異文化交流論ゼミとして、第1回目のフィールドワークに行かれた先輩の報告書「Paradise : シンガポール・インドネシア」を参考に、あれこれ案を練らせていただいた。

謝謝、そして、With Many Thanks.

山口県立大学国際文化学部 異文化交流論ゼミ  
平成10年度フィールドワーク報告書

発行日 平成11年6月30日  
執筆 藤田 恵美、藤田 幸、渕上 智美、  
　　聞 天塙、柳谷 香苗、矢野 優子  
　　中村 幸惠  
編集 岩野 雅子  
印刷 海田印刷